

六十六

人生の行路目的なしに運ぶものは愚の極みなり。一日片時もはやく大決心せらるべし。

殊に御身は病氣の身、今日ありて明日期すべからざる身、その病は一朝床にも就くことにならば忽ちに鬼籍に就かざるべからざるにあらすや。斯かる身を以て一大事の修行を第一にするの精神なく徒らに夢幻の世の事に心を費す如きは實に愚なる事ぞ。

御身は先夫に早く先きだたれ、實は其當時に於て、身はここに在りても身分は世外の人となりて其菩提をも弔らひまた自分のさとりを開くべきなり。意志強き道心堅固の女丈夫たらば、を被り黒髪をも剃り墨ぞめの身となりて、心は高く物表に出で真如の月を眺め其節操は雪よりも潔く、其志は天よりも高く心の光は日月と輝きて、世の情婦をして慚死せしむべき範を爲すこと、眞の聖法を求むる女史の志なれ。視

よ彼の女丈夫巴御前は、三十あまりにして法衣を着して無上菩提の道を求め、靜御前は義經にわかれてまだ二八の花正に綻ろびんとする頃ほひ有爲の花の色をすてゝ、緑の黒髪を剃りて精神にまたなき花の香をめでにしにあらすや。女英政子前は法衣を着して政事をつかさどり、泉式部はいまだ四十路にいたらぬ時に剃度して専ら念佛三昧を修せり。

御身に勸むるに、世の今日の通弊なる、衣食の爲に剃髮染衣となりて、あさましき世渡りのなかまに交りて、餘命を送れと云ふにあらす、淺ましき世わたりの尼などの卑しき情操にして、世の爲に輕しめらるゝものを見れば、志想高き人の志すべき道にはあらずとおもふべし。しかしそは通弊、今勸むる所は必しも形の上に重きをおかず、またの交を爲して其仲間入を爲せよと云ふにあらす、唯汝は已に此世の人では無きものとなりて、淨き御國の人となりて身はここに在りながら意は娑婆外の人となりたまへとのこと。

一切の夢幻の望を悉く捨ててしまひ、

已に此世の人ではないものとなれ。一切の妄想意志悉く無くして、如來光明中の人と化し去るべし。昔の中將法尼のごとくに娑婆の人でなくば、いかに他人が評せようとも謗らうとも我に關した事なく、精神は極樂のぼさつとなりて、身は日々に縁にまかせてつとむべし。

なれども寧ろ冥想三昧、禪定三昧、念佛三昧の身となりて、草庵にこもりて一切の事を抛ちて一心三昧の行者と成りてしまふ事が適當とおもふ。

とても俗僧に交りてと云ふことはとても出來ず。よしや人間より悉く同情を失ふとも、如來さへ充分同情をしてくれればよいと云ふ精神に成つてしまひ、一切の望と意志を悉く捨ててしまひ、もはや此世の人ではないとなれ、全く其の精神になれば、衣食は憂ふるに足らず。如來より衣食はたまふ。

衣食は全くなくしてしまへば幸に肉身をさりて法身のぼさつと成るべし。

身を捨ててしまふべし。されど死せよと云ふにあらず。一心金剛の如く堅固になればいかなるものも恐るるに足らず、名譽とか利慾とかあればこそ諸の憂と怖とはあれ。身を捨ててしまへば何も恐も憂もあることなし。一心ここに決定せば身命を支ふだけの衣食は供養すべし。法を衆に及ぼすことは如来の命令にまかすべし。

一切の望を捨て禪念佛三昧の行者と成りて、草庵にこもりて一心に修行して婆の念を一切断つてしまふべし。

明日もわからぬ身を以て百年の後を憂ふるが如き愚をなすなかれ。今日から精神は斯うなつてしまふべし、もはや身はなきものと決心の上はいかなる災害こもく來るとも敢へて恐るゝに足らず。たとへ眼病も憂ふるなかれ。已に身さへも捨てしまひしもの眼もなくとも一心の眼は開くことは出来る。唯身の死ぬまで禪三昧を修すると云ふ決心をすべし。肉は死しても精神は死せず。肉の死はむしろ甘んじて愛、と云ふ覺悟せよ。

若し予の言を信受せず、ウハの空にいたづらに世に執着して日を送る如きならば、汝が過去に受けし處の惱と悶と恥とは十分の一にして、將來に受くる所の悶と恥とは十倍うくるものと云ふことを忘るべからず。

身を捨て身の事を思はず一心に修行するほど快きものあらじ。いかなることが出来ようとも決死の覺悟の前の修行には、いかなる事も何でもない。其決心ない爲に人は其の修行も出来ず、世の虚榮心や淺ましき志にはだされて徹底することが出来ぬのである。

汝此決心出来ざれば、もはや世に活きるとも何の詮もなし。むしろ自殺するに如何じ。

人間は死を決して事をなせば、いかなることをも成就すべし。殊に汝の如き身は非常な方針を取らざれば成就しがたし。何事も爲さずして活きるは寧ろ死の勝れたることといくばくぞや。

禪三昧成就すればここに居ながら世界の出来事も自ら神通を以てわかるやうになつて來べし。

禪念佛三昧の行者となりて光明界に住むほどの光榮世にあるなし。

ここに決せよ。

六十七

御めぐみによりて、ぼんのふのねついつかうせて、おのづからなり候。こころは如来さまに御まかせなされて、やすしくらす時は病もおのづからいゆることならむ。

六十八

この光我らが心の無明を破る。この光衆生の罪とがを消除す。苦しみを化して妙樂とす。禍を福となす。この光を被る人はいけるくわんせ音。この光即ち眞の佛敎

なり。この光ひかりを示しめさんが爲ために、しやかむに世よに出いで給たまふ。この光ひかりある所ところ極樂世界ごくらくせかいなり
いけるくわんせ音おんとなつて、ますくこのみひかりのなかに、勇猛精進ゆうまうしやうじんせられんこと
を。

六十九

われらが煩惱ぼんのうのほのほは、いかにさかんなるも、如來にょらいのみめぐみのたきつせによる
時は、いつしかすどしきになりぬべし。われらがこゝろの垢あかは、如來にょらいのみむねにより
てきよめらるべし。

七十

如來にょらいのきよきみむねによりて、きよめられし心靈しんれいは暴風ほうふうの爲ためにもなやまされず、い
つも白日晴天はくじつせいてん、げにやつねに天樂てんがくは空そらにひびき黄金わうこんの地ちをふみゆく心地こころこそすれ。し

かし肉體は、もどく罪のかたまりなれば、種々さまざまのなやみくるしみもてわれくをばげまし給ふとなん。深き御めぐみのほどと存すれば、またかたじけなしのさむしいやな日でもまた病氣などの苦しき日でもやはり一日一日としてまたも得がたき時間たるの價値は失ひませぬでありますから、一日も一時間も無限のひかりと無限の壽によりて充たされんやういのり候事大事に候。

七十一

人生の一大事は一心に念佛して大光明に接觸し之によりて復活し、恰も此身體が太陽によりて活ける如く、無量光の靈太陽によりて靈に活き燃ゆるが如くに活ける所にある。眞黒なる炭も熾に火がつく時は眞紅になる。われくが煩惱の炭も如來の慈光の日に感化して靈感極りなく活々して靈の生活に入る人こそ幸福にて候。

七十二

ミオヤの大なる御めぐみに感謝したてまつる。

如來の明なるみ光と清き空氣と新しき糧とによりてこの肉をやしなひて給ふは全く肉のみにあらずして、心靈をやしなひて永きいのちに入らしめんが爲と存じかたじけなく、すべての人と共に御めぐみによりてみすくひをえんことをいのり奉る。

七十三

吾が愛する所のきよき友よ、この寒さの中にいかゞでありますか。此頃承れば御不快のよし昨今はいかに候哉御案じ申上げます。わたくしは其の後埼玉千葉の方をめぐりて御めぐみの福音を人々にわかちつゝ、日をくらし、やうやく先達てこちらへまゐり候。あなたのことはいかゞあらうと原さんにうかゞひ居候。此の頃は湯地さ

んにいつきなされて、その御地に御滞在のよし、また原さんへの御手紙によりて見ればこの頃また少しくわるいと、の事、かへすがへすも御大切に御保養のやう、なにかにとなく御ころせはしないのでありませうが、そのなかにてたふときみほとけの御めぐみを感じなされますかいかゞであります。

この肉體はいかなる人にも、病氣をば免るゝことはかなひませぬ。釋迦如來でさへも平生御頭痛や御脊の御いたみはたえましまさざりしよし、釋迦如來はよしや御病氣なき時にさへも食をたち身をくるしめて一心をこらしなされしとの御事と存じ上げますると、われわれはいかなることにても堪忍はできません。

孔子に仲といふ實に賢人といふべきやうなえらい御弟子がありました。そのかたは壯年にして癩病にかゝりますると、孔子もあゝ此人にして此病はあり、これほどの心がけよい人でさへもかやうに病氣出るとはマアと嘆息なされました。ですからあなたも病氣に成つたからとてこれもネー生きたる人の常ですからよんどころありませ

ぬ。

信仰の徳として、人はよしや禍にあふてもそれについてまたさいはひを感ずるやうにするのが靈化と申します。自分の心にてわざはひも幸におもひかゆるのです。たとへばあなたが病氣に成りて、こゝろをいためるのでせう。夫についてまたかやうにおもふのです。今われに二つの大事なものがある。からだといま一つはたましひである。此二のうちどちらが大事と申せば、だんくつめて見れば精神とからだとはくらべものにはならぬ。精神の方が大切である。そこでよしからだは病氣になつても精神の方は大なる御めぐみによりて御光によりて安らかでありますれば、病むからだについて病むことのない魂をかつてたしかめて置きことをおもふてよろこぶやうにしてはいかど、いつかからだは死すべきなれども、死ぬことなきたましひの歸着するところをさだめ置きし身にはまことに安心ではありませぬか。安心がなかつたならからだと共に心までも病んでしまひ、死なばこゝろまで共にしづみてしまふではありませぬ

か。よしや病氣のためからだは一室を出ること出来ぬとも、心は十方界に照りわたるやうに、如來のかぎりなき光明の中に住しぬるは、實にひろきことかぎりないではありませんぬか、家屋は木と土にて造りたる住居、からだは米や菜等や肉類で造りたる住居でありませう。御主人は、どなたで御座います。

心靈と肉體とのたとへばなし。こゝに一りの書生がありまして、貧生の事ですから、東京でまことにやつ／＼しい住居をかりて僉末な服をつけて、一心に勉強いたしましたこと、十年一日の如くでした。その十年間のかれが勉學と修行とは、彼がからだは、一なれどもたましひは、十年むかしとは、雲泥のかはりとなりまして、立派に法學が出来ました。心が全く充分に出来たのですから仕官の試験には立派に及第して、名譽な官につきました。すると立派な官服を身にまとひ、立派な官宅に住ふこととなりました。そこで従前のほんに膝をいゝるばかりの、幣屋にみすばらしい書生が、からだは先の人にかはりなけれども、服と住居とは雲泥の相違である。

その如く一心に如來の、きよきみ名をとなへて、みひかりをたましひに感じて久し
くするに、寶石のみがくる如く、如來のみひかりによりて、たましひが立派になりま
すれば、このからだを去りて、神は無爲のみやこにいたりて、三十二相はさながら、
皎々たる満月の如くに智慧の光は十方にかゞやく觀世音ばさつのやうに成るのであり
ます。

貧生は前の屋を出ることを、執着してゐたのでせうか。

よしやこのからだは去つてしまふとも、觀世音の如くになれば、よろこばしいでは
ありませんか。けれども其たましひの分相應に身を受るではありませんか。

ついでには、このころはいかゞしたならば、光かゞやくやうに成るのであらうとな
らば、やはり 聖き御名をとなへ、たふとき御ころをおもひあげ、またたふとき御
相好をおもひ、またはねてもさめても御光明のなかの住居であるとおもへば、そのお
もふ心が、いつしか清きよなるころに成るのです。その聖きみひかりにきよくせられ

たるたましひはいかゞになるのでありませう。

御こゝろみにあひましたか。あなたが病氣のために、どの位にしんばいするか、そのなかに於ても、たましひを動かさずに居らるゝか、しけんではありませぬか。

平生大丈夫に出来るつもりでも、しけんにかゝると、おじけがくるやうでは、及第できませぬ。そは平生眞實に修行しないと大丈夫にゆきませぬ。

わたくしは思ひます。よしや今日の身は終らうとも、今日までにたましひに染みこみたる如來の御ひかりとみめぐみとは、無量光と無量壽ですから、どこまでいつてもいかになつても、盡るものではありません。また、何事でもあすの樂しみとおもふて居つたことは、いつかもうむかしのことになつてしまふ。來月のとおもふことは、已に先月になつてしまふ。時間ばかりはとゞまつて居らぬものですから、何もかもみなすぎさつてしまふ。けれども、それでもいつになつても、過ぎ去つてしまはずしていつでもむかうて居る方面にまことにくかたじけなく、たふとくおもはるゝのは、

如來とまた光明のかじやく七寶莊嚴のごくらくとはいつになつても向ふ方に在るので
すから、いつでもものぞみのなかに、たとへどんなことがあつても落たんと失望はあり
ませぬ。

さてあまりながくしたゝめてあまり御病人の御目を煩はし申すもいかじと存じ候
へども、ついくかへすくも御大切に御らんになつて、御返事とおもふて筆をとる
ことが御わるいければ、無理に筆をとることはいけません。御返事はなくともあなた
の御ころはよくとほつて居りますから、まづ御大事になさりませ。

七十四

今日より誓つて此條目を守らむ

一、時間は生命なり大切なる時間寸陰も無益に徒費せざらむ

二、婦人の弱點なる虚榮心を離れむ

己に實力實行なくして名譽を望むが如きは全く人格の修養に害ありと雖益なし

三、堅く信實を守らむ

虚偽は己が徳を失ふの基なり誓つて之をさげん

四、法言に非れば言はず無益の雑談に時間を費す愚を學ばざらん

五、人の悪評を爲さざらむ

人の長所を見て短處を見ざらん自ら顧みるに自己の弱點甚だ多し他人の我を評するを聞かば我いかに感せむ反省して他人を評する勿れ

六、自己の養生事の爲に他人に勞を作さしむる勿れ

七、人に怒る勿れ

怒を發するは自己の愚を他人に發表するに過ぎず智慧あるものは怒ることなしゲー

テ曰く怒は愚者の胸に宿れる有毒のガスなりと

八、修養の爲の我が身なることを忘るべからず

九、濫りに他人を使役すること勿れ

人は確乎たる目的を立て寸時も之を達せんと欲するの欲望なかるべからず

第一に如來の心光を獲得すべし

之に達せんが爲に念佛三昧と瞑想とを離るべからず

善知識を求めよ

聞法を心がけよ

七十五

益御清康に

御めぐみのなかによろこばしく御つとめ成され候こと大慶此事に候。わたくしも御めぐみによりて、なまなかながら御奉公申上居候間御安心下されたく候。

久しふりにてかやうな御はなしをいたし候間よく御聞を乞ふ。

楞嚴經のなかに數多のぼさつがたやまた御弟子たちなどみほとけをめぐりかこみて
 いませしに、また尊き御法りを聞侍りけるに、佛陀釋迦牟尼が仰せらるゝには、もろ
 くのひとたちよ、汝等は各深きさとりをえて佛法の奥に立ち入りて、いまは残る所
 なきにいたりぬれども、各其たしかに信仰を獲得せし無生忍をえたりしとき、銘々
 まちくであらうが、みな自分のさとりに入りしとき、物がたりをなされかし、しか
 らばのちくの修行をするひとの大に因縁に成るのであらう。また參考に成るだらう
 から能く語られよ、との仰せにみなくかしこまりて、まづ第一ばんにあにやきやう
 陳如といふ御弟子が、自分のさとりをえたる時の因縁をのべられて、次第々々につひ
 に第二十四番目にいとかしこきひとりのぼさつ、うるはしき三十二相の月の面そのか
 ふばしさいはんかたなし、光顔るみをふくみてすゝみ出て、ほがらかにすみわたりし
 聲はかりやうびんのごとくに、衆人に愛敬欽慕せらるゝところの聖者こそは御名を

勢せい至しぼさつと名なのらせ給たまひける。即すなはちいはく、

わたくしこと發心ほつしんののち、ふかく信心しんじんを得え無生忍むじやうにんをさとりし時ときの因縁いんねんを申上まをしあげげませうとならば、過去無量劫くわくごかりやうこくのこと無量光佛世むりやうくわうぶつよに出いでましぬ、つゞいて十一のみほとけ世よに出いで給たまひ、末すまの超日月光佛てうにちげつくわうぶつわたくしにいと聖きよき御法みのりを教をしへ玉たまひき。即すなはち念佛三昧ねんぶつさんまいとぞ云いひぬ。そはいかにその三昧さんまいを修しゆするぞとならば、たとへば、いとなさけふかき母ははにひとり子こありけるに、子こはいつか家いへを迷まよひ出いで、のち久ひさしく他郷たきやうにありて困乏こんぱうして苦くを受うくることかぎりなし。あまりに身みのくるしきに、ふとむかし母ははのもとにありて、朝あさな夕ゆふになではぐまれしことなど思おもひ出いてより、しきりに母ははにあはまほしくあくるゝ思おもひは、つひに寝ねてもさめてもわするゝ間まもなくぞありけるに、また母ははのかたにてもわかれにし子このいかにふびんやと、愛念あいねんのかゝらぬひまもなかりしに、母ははと子この相互さうごに憶おもひ念ねんふ念力ねんりきは、たとひ身みは千ちさとの雲くもをへだてければとて、心こころには毫すこしもへだてなければ、子このあくがるゝむねに、母ははの面おもかけは宛然げんねんとして眼めの前まへにさへ

ぎりぬ」と同じく

如來はまことのミオヤにてまませり。衆生の子は一たび本覺眞如のミオヤのもとをまよひ出て、久しく六道のちまたにたゝすみて、ミオヤ在すことをもつゆしらす、あまり世のはかなさにみのりをききはべりてより、はじめて如來のミオヤなることを知りてより、いまはミオヤはたかきみそらのあなたに、こなたはつたなきぼんのうのあかにけがれ見るだにあさましき身とはなれども、さすがはおやと子のしたしみは、わが身のほどをわすれ、ミオヤをしたふことかぎりなく、寢てもさめても、おもひわすらふ如來を憶念することの斷る間もなかりしに

如來はことに大慈悲ふかくましましたませば、つねに衆生を愛念し給ふことしばしもいとまはましまさぬにぞ、あくがるゝ子の憶念のなかに、如來の宛ながら聖き靈なるみすがたは、心眼の前にあらはれ給ふこといかにありがたきぞや。之を念佛三昧と名づく。

但し行住坐臥つねに如來を憶ふこと、子の母をおもふ如くにてあれば、現在當來遠

からず佛を拜見したてまつる。

餘の方便をからずして、たとねてもさめても如來を憶念したてまつるばかりぞ。之を香光嚴とは名づくなり。

わたくしはこの念佛三昧の法によりて、無生忍を得候へば、しかしてよりこのかたあまりかたじけなく候へば、すべての人に教ふるに此念佛三昧をもて示すなり。

これぞそれがしが信心獲得したる因縁に候ぞ、と申しのべければ、大會は聞きはべりて信心肝に銘じ、しやかむには善哉々とさんたんし給ふ。

七十六

此頃の寒さは殊に厳しく候へどもいかゞに候哉。御自愛是祈り候。

さて何はともあれ、すべては其時々になみなかはり行くしばらくのかりの事なれば、何じしでも一大事なる信仰の門を開きて

如來大光明を發見して

如來と共に行住坐臥に離れぬやうに。

如來ほど大慈愛の深き御方は有りませぬ。故に如來と共に在るときは、自ら如來の大慈愛に同化せられて、己がこゝろも慈光に充さるゝやうに成るべく、寢ても寤めても唯々離れてならぬのは

如來さまにて候。

惠心僧都の、ぬれば夢、さむればうつゝ、つかのまも忘れがたきは、みだの面影、の道詠が有りがたく存じ候。

而して成るべく日々心の日ぐらしが、成るべくくく如來のみを憶念して、三惡道や四趣の心の日ぐらしを成さらぬやうにねがはしく候。

日々に何返もくわが心を返照して

如來様の中に入りや否やをかへりみるのが然るべくと存じ候。

口に稱名と共にこゝろに

如來の大慈悲の面影を念じ候こと有り難く候。

東に朝日のかゞやく如くに、如來は我に映現し玉ふ。夕に夕日の照すとくに、

夕は我を愛護し玉ふ。

あなたがそれほどに我を愛して下さるやうに、我いかにしてあなたを憶念せずして

居られませうといふやうに、念じなされんことをねがはしく候。

尙くさく申述度候も後の便りに譲り候。勿々

七十七

聖きみむねにより新しきいのちを與へられし聖き吾が友どちまでにまをす。此ごろ
ますく信念いやまして、御精進のほど遙かによろこびに存じ候。願くば聖きみめぐ
みにより、はやく自己罪惡の垢質を除きて、精白なる皎月よりも潔ぎよく雪よりもき

よく、聖き靈の生活たらんことをこそ樂ふ。それ聖き光によりて平和なる安らけき日を暮さんことを好ましけれ。歡喜光によりて一家團樂のなかに、琴瑟相和しを頌ひ、四海波靜かに、斯の土に淨土の莊嚴は各自の精神によりて社會に實現せんことをねがふ。各自の信念のいやましたる功果は何の現象となるのであらう。

聖きみむねによりて、各々の精神に現象するのでないか。各々の内容に如來の聖意實現する時は、いつしか表に現はれ言語動作として發現する時は、隠すことは能はざるのでせう。如來は是法界の身にましますば、何時何れの處にても聖きみこゝろの在さざる處はないのである、已に聖典に彼の至尊なる佛陀の靈光は十方世界を照して、障礙する所なきの故に。無限の光明なる至尊と號けたてまつると。其障礙なき靈光は何たる態度を以て、何の所に現象するのであらうとなれば、先づ専ら信仰せる人の精神に現はるので、最初は内面に充ちみちて、而して聖意はあふれて外に現象するのである。然る時はつひに道德秩序正しき社會制度、道德の光明世界と化現なさるの

である。

社會の道德制度のうるはしき世界となるは、その本質は彌陀にして、すべて各自の信念によりて、彌陀が内容に充ちてのちにおもてに發現し來るに外ならず。各自の精神内面には、いかなる形容をも如來の聖靈は現象するのであらう。吾々の如き罪惡の深重なる精神にも、絶對なる靈光は遺餘す所ないのである。何れの所にも實在せざるなき如來の靈光にてましますればなり。如來の靈光に感染し、靈化する心のすがたは、何たる形容でありませう。吾人は宗祖の述懐として詠じ玉ひし聖歌により、其消息をもらしてあると存じます。

阿彌陀佛にそむる心の色に出では

秋のこずゑのたぐひならまし

即ち此の道詠こそは靈光に感染し、靈化せし形式をしめされしのである。内容のほどは

われはたゞいつかほとけにあふひくさ

こゝろのつまにかけぬ日ぞなき

と示されてある。

初めの御詠によりてす少しく宗祖の主觀御内面を推し上げ奉るのである。大師は御年十八歳にして出離の志ふかく、自他平等に解脱の道やあらんと二十餘年の間出離の道に心を煩はしおもひをなやまして、唐土傳來のあらゆる聖教眼にあてすと云ふことなし。何れも難く攀ぢ得べくもあらず。つひに善導大師の觀經の疏に一心專念の文に深く發悟、諦に彌陀の願意をさとり、善導の素意をえられてより、専ら彌陀の一行三昧に晝夜莫廢、ねてもさめても口に稱る所は彌陀の稱號、意に念する所はみほとけの本願、つひに多年の功つもり徳かさねたる功果は、精神に薰染し心靈に靈化し、その感染したる彌陀の光彩が、おのづとこの道詠に露出したのである。此おこゝろはむかし一代の聖教に眼をさらし意をとゞめたるそのかみは、諸の聖教大小權實顯密

等の法門は、青白色を異にし雑色の數多なり、これに寄する心のかゞみかれこれ定かならざりし。然るに今たゞ一心一向に、阿彌陀如來一佛にのみ、こゝろをとゞめ神を凝せば、いつしか御名によつて心の水すみぬれば皎月の尊貌は自ら映現し、依正二報の妙莊嚴は宛然として心鏡に現はれし。彌陀に感染したる心の形容何をもてか喩にいはん。うつくしと云はふかうれしいと云はふか快しと云はふか尊しとのべんか、世の中に何ものがあつて此内容を擬似せん。ランプの光を以て太陽にたとへんか、とても内容は之言はれじとすれば、せめて形式なりとも且らく示されて、露出してかくは詠じ玉ひしことゝ存じ候。昔は青くなまさかりし春の色も、いまは聖旨聖籠に感染したる秋ののすへに染み出でしは々そのもみぢ。

大師の内面のほどは、とても吾々どもの想像のえも及ばぬところ、闇夜に燈火なく聖教をてらし一室燈なく稱名の聲朗かにして身光夕陽にすぐれたりと、内に充ちたる光は外感覺に發射しぬ。然し蓋は大師は特別の權化なれば、吾々の及ぶ所に非ずとて

自ら棄るは甚だ道にならず。大師一心不亂の意志勇猛精進こそ權化を現す原力たり。一心に彌陀を念するに非ずば、いかでこのことにいたらん。其本を討ぬれば大師は少しもほこる所ではない、奪て言はば、全く如來の靈光が大師身心の器によつて、發現したるに外ならざればなり。皎々たる月光は太陽をはなれたる光にあらざればなり。しかあれば盡十方無碍光如來は、何たる靈光をもつていかなる罪惡にほろびたるまでも障りなく照したまひて、衆生の心靈を回復して玉はることにてあらん。そは全く如來の無上靈知と靈能とは、處として實在せざる所なき靈にて在して、信念に應じてめぐみをたまふが故なり。吾々が自己をすて、一に至尊を聖きみ名によりて祈り上らば、必ず吾々をすくひ靈化したまふこと何の疑ひかあらん。

教祖の教へたまひし聖典によつて、聖き御名によりて聖德を表明したまふて、念する人に感染し靈化したまふを、今つゝしみて聖名によりて聖德を表明せんが爲に、聖名によりて讚頌し上る。

清淨光

(人の感覺即ち眼耳鼻舌身に感染する光 感覺清淨となりて靈徹す。)

にごりにいでいさぎよく、さけるはちすのかほりこそ

きよき光に開れし、人の心の花ならめ

あかねさすてふ朝日影、みるもまばゆく輝くは

清き光に照らされし、人の心にたぐひてん

みがきて照すまにの珠、ねりてかどやくこがねこそ

きよき光にみがれし、人の心の色ならめ

雲をあらしに拂はせて、さやかにてらす秋の月

きよき光に照されし、心のすがたにたぐひてん

富士のたかねに白たへの、雪のすゞしき色こそは

清き光にみがれし、人の心のすがたなれ

歡喜光

(人の感情に感染する光。斯の光によりて心の苦惱うせて平和に歡喜にみちて

うるはしき心情となる。)

くるしき海はかぎりなく、まよひはふかくそこもなし

めぐみの船にのりえたる、人の心は安らけし

うき世のうみは廣くして、なやみの風ははげしくも

めぐみのみなどに船とめて、やすらふ心はやすらけし

朝日にはふさくら花、八重こゝのゑはよろこびの

光に開きてうるはしき、人の心にたぐひてん

一たび開きてとことには、かはらぬ色はよろこびの

光りにあひてうれしさの、人の心の花ならめ

天にも地にもよろこびの、光はあまねくみちみたり

心の花のひらくれば、とはにのどけき春ならめ

知慧光

(此の光によりて人の佛知見ひらけてあなたの聖きみすがたと聖きみむねとを
示さるゝ)

知慧光をあふぎつゝ、心の水のすみぬれば

こがねのすがた妙なりし、月のおもかげやどるなり

玉やこがねにかじやける、きよきみ旨はさながらに

聖き光にみがれし、心のかじみにうつるなり

知慧光の日やてらす、さやまの窓のひらくれば

無明にかくれしひめぐとも、啓示さるゝなり悟るなり

妙なる法の身の月は、照さぬ所なかりけり

まよひの雲のはれぬれば、わがのきばにぞながめえん

不斷光

(人の意志に被る時は野卑の情操うせて金剛の意志靈化の道德心となりて活動す)

われらをすくはん爲ならば、ならくの底にしづむとも

しのびて悔ひとちかひてし、そのみこころをあふげかし

われらがためにいくたびか、數をも知れぬ身をすぎし

ふかきめぐみと思ほへば、身をくだきてもむくはなん

つみにほろびしわれくを、すくふ方便をたてんとて

五劫に思をつくしたる、ふかきめ恵みを忘れなよ

神聖正義のみひかりに、くらしつゝある身としらば

聖きみむねをかしこみて、命のつとめをはげむべし

天にも地にもみちみてる、めぐみの光にかむるなり

ふかき恵を思はへば、感謝の心なわすれそよ

七十八

欽啓時しも秋のすゞしき折、此頃いかゞつとめ候哉

ついてはいかゞであるか先達て御はなし申したるやうに矢張り處々の神社佛閣を詣
うで、徳雲寺の尼僧さんのやうにして一生懸命に信心を凝らしたことならば

佛さまの光明によりてすべての人々にも能く融合することの出来る、即ちかどのとれ
たる立派な女ばさつと成るであらうと存じ候。

たとひ金剛石でも水晶の珠でもまだ璞のかどがありてはいかに立派な品物でもまだ
ねうちが出ない。御身のやうに立派な器でもまだかどがいかにあらうしいから、
かどのないがらす程にも世に用ひられない。をしいことである。御身の精神は立派は
立派でもかどがありて、使ひみちにならないから駄目である。

をしい玉であるからさつぱりと角がまるくなるまで修行して来たならば實に立派になる。一日おくるれば一日の損であるから、一日もはやく修行に出ては如何。

全くである立派な玉をみがすしてつまらなく日を送るは實に惜しいから、早くみがきに出るが得策に候。

大におもふ處があつたから申述候。

七十九

此ほどの御手紙正に披見候。

此の世は自己を鍛錬する處の修行の爲に生れ來りしことにてあれば、一生を盡して自分の爲め他人の爲に修行すべきのである。御身はことによい方もよいけれども随分難點も多い。であるから、よつほどミオヤの光明によりて治るにあらざれば中々其難點はのぞきがたし。自分で自分の氣質は分りがたし。他人から見れば直にわ

かる。第一我まんを取りのけなければゆかぬ。

たく山氣質のなかに治さなくてはならぬ事多かるべけれども、すべてミオヤの光をお頼み申してなほして戴く外はない。先日おはなしいたしたる處の美の國より二人の者が出向きて追々に其地方の婦人と兒どもに

如來の光明を宣傳へることにいたすつもりであるから、ともにおやりなされ。けれども二人は僧侶であるから、ことにまだ遠國へは出たことがない人であるから、ともに快よくしなくてはゆきませぬ。

この兩人がついたならばあなたより河口さんや五井さんにしらして下され。種々申のべたきこと多く候へども餘はまた御面語にゆづり候。

八十

御書簡によりてあなたの御幼少のおひたちよりの事、また御氣質のことも承はり

候。顧ふに愚劣幼少より將た青年時代には、何れといはゞ至つて世間の事には遅鈍の質にて、衆人の前にては必要の事さへ判然と辯ずることの能はざるものにて候ひき。現今とても生得の性質は持つて居るものゝ、夫れでも今日にては自己の職としまた主義主張の前には、千萬人と雖も恐れなく、忌憚なく發表するを得るやうになりしは、實に如來不可思議の力を以つて、己が天性の質を改造して給はりしものと存じて、感謝する次第にて候。更におもふに、人間は表面的に利口なる人は、其の奥に如何なる境遇にも動搖せずてふ眞の勇氣はいと少く候。

されば君よ、天稟は父祖よりの賜物、之れを改造して自由の天地に出で、無碍自在に獨歩するのが、人の親よりはもつとく大なる大ミオヤより稟けたる奥底に潜伏してある靈性を開發して始めて、眞の自我實現的何の行動も出來得るものにて候。されば天稟のいかんを以て必ず悲觀し給ふ勿れ。還つて世のことに鈍き様な質の人にしまして、奥に潜める自我を發揮する時は、かへつて眞の勇氣もまた眞の大なる事業も出來

得るものにて候。天稟をたのみて、自ら得たりと思ふ人は、還つて失策しがちに
候。大器の晩成、決して憂ふる勿れ。まだくあなたの奥底に潜める大の力は、毫
も發揮せぬ所にて、自ら萎縮して居るものにて候。いざ之れよりは、いよく勇み進
んで一日く 一歩を進みて「是よりは」眞の自由の天地に精神的に出で、人生
を向上の一路として、勇氣を披握して突進し給へ。されどもそはあなたの天性の免さ
ざる處、こゝに於て、あなたの奥に潜める靈性の大ミオヤなる無量壽にして無量光
なる如來の無盡の靈力を仰ぐの外之れなく候。人の頭の奥底には、自分ながら測り知
り得られぬ程の無盡の伏能を藏して居るものにて候。大なる如來の光明を仰ぎて、一
心不亂に念佛して、自己の奥の無盡の藏を開き、ますます新しく進むべきをこひ願は
しく候。

愚痴自らおもふに、青年の折、男子として、女子たるあなたのそれに比較して、も
つとく遅鈍にて、ひっこみ思案の漢にて候らひき。然るに

大ミオヤの如來は、實に人格を改造するの靈力と光明とを以て、我を復活せしめられ候。またあなた今日の御家庭にて、御舍弟衆に對する責任の事に就いても、實にかよわき女性に對して何とも同情に不耐候。

しかし是につきても、更に一番の勇氣を披して起ち給へ。教祖釋尊は、物質上の最も幸福なる豊富に充分なる位置を自ら棄て、還つて物質上のすべてに缺けたる山林の生活に入り、今日の乞食にもあるまじき木の實を食ふて命を支へ、而して心靈上の徳を求められたりき。愚禰も青年の折、相當に財に富める寺院を以て我を迎へたるも、我は盡く之を避けて、還つて自ら下總小金ヶ原野の草庵を創立したりき。然してよりこのかた、常に唯なるべく僥倖は悉くさけて、自給し、今日當學校を創立し會堂を建立しました子弟を養育するに、悉く筆墨の勞働を以て之が資を造るかへつてこの處に自由の天地を發見致し候。されば君よ。天の無限より與ふる處の力には、士女の區別はなし。されば起てよ、奮へよ、大ミオヤはあなたに非常なる力を加へ給ふ

なり。

將來のあなたの職業については、精神的に宗教家となつて、身は現在の位置に置いて、専ら努力し給へ。おもふに宗教心を自ら完全にもつて居らば、現在のあなたの職業は、最も神聖にして最もよき業とおもふ。爾しながら最も完全なる宗教心がなかりせば、或は他の道を求むる如きを遠つて利と思ふかも知らん。

先づ現職を最も神聖として、大ミオヤより豫て見立て下されしものと信じて、専心に努力し給へ。而して宗教心が愈々進むに従つて、其中に深き長き高き光明の發見する事あらん。(中略) その教養する女子を我子とし、我妹として、大ミオヤよりあてがはれしものと信じて、親切に至誠に専ら女の精神教育を樂しみとしたならば最も宜しきかと存じ候。若し又その中に、宗教的に女學校を立て、女子を養ふ特志家でもあつて、自己の理想の教育できるやうな事でもあれば、夫れまた然らんかと存じ候。結婚につきては、あなたの理想に適し、あなたの精神の自由を沮害し障礙せざる限

りに於ては可ならんも、若し然らざれば、其の理想とする職業と結婚して、満足の意を以て業と階老同穴を契るもまた然らん。ナイチンゲールの如きは其の業と結婚して潔く終れり。愚禰の親戚に一の女子が終身獨立して、裁縫女學校を創立して、地方の女子を理想の如くに養ふを目的として、渡邊女學校の高等科を卒業して、已に教場を建てんとするに及んで、地方の財産家郡内の資産家より、強請的に結婚を申し込まれ、思ふ様に教場を立て呉るゝ約束の下に結婚した。しかるに其舅なるもの非常なる守銭奴にて如何にもその思想の卑劣なるに遇ふて今は自己の高尚なる理想を犠牲に供せねばならぬを嘆じて、日々閨涙の中に日を暮して居られ候。いかに財産などはあつても、人とつきあひさへできぬ卑賤な父(舅)をいたゞく身の悲しみ、自己の靈性までも埋没するかと思ふて、實に終生の恨事なりとてなきくづれぬ。(後略)

天てんに太陽たいやうは照臨しょうりんし給たまへり。この大だいなる力ちからなる光ひかりに依よらざれば、此この肉體にくたいは活いきること叶かなはぬものにて候よふふ。人ひとの頭あたまの中臺ちゅうだいなる宮殿きうてんにある心靈しんれいは、無量光むりやうくわう如來にょらいの光明くわうみやうに依よらざれば活いきることできぬ。然しからば如何いかにせば我等われらが心靈しんれいは如來にょらいの光明くわうみやうを被かむることを得うべき。只ただ至心たししんに聖名みなを稱となへて、聖意おほしうしの現あらはれを仰あふぐ處ところに、如來にょらいの心靈しんれいは我われらが心靈しんれいを育はぐませ玉たまふ。

今いまあなたが至心ししんに如來にょらいを念ねんする時とき、大おほミオヤの如來にょらいは、現げんに眞正まっしょう面に慈悲じひの面おもてを注そそぎて、あなたに向むかはせ給たまふことを想おもはず候よふふや。至心ししんに念佛ねんぶつする時ときは、あなたの信心しんたいの鏡かがみが明あきらかに磨みがけるに依よつつて、現げんに在ますことを明あきらかに信しんせられ候よふふ。只ただ須すべらく一心しんに念佛ねんぶつして、信心しんたいの鏡かがみをみがき給たまへ。

慈しみ深き我等がミオヤよ。あなたが今我身を愛し給ふ如くに、西の京なるきよき我同胞を愛し給ふならん。されば其の同胞のきみの胸のうちに宿り給ふ如くに、今我胸のうちに光り耀きて在す事のありがたさ。

西の京なるきよき同胞のきみよ。

あなたのなさけ込めたる御玉章は二度まで披き見る事を得て、いたく喜ばざる事を得ぬことは、あなたが單に大ミオヤの御慈しみを悦びなされるのみでなく、大きな苦しみに出遇ひなされても、還つて夫れを心靈を研く器として、人生を修行の道場と觀傲す信念の安心をつけなされたことの出來たのは、實に隨喜に堪えませぬ。即之れぞ菩薩の心であります。經に恁やうに示されてあります。

『菩薩には是といふて決まりたる師はなし。性自分の缺點を見付けて、之れを指摘して謗り毀る人こそは眞の師である。それに氣づきて改めて、ますます良き方に向つて進むときは必ず自己を益する事大なり。』と

實に人生は一生を通じて、永遠に向上すべき菩薩の修行の道場であります。いつになつたからとて、もう修行は卒業して了ふたといふ事はなし。どこまでも向上すべき修行道場にて

大ミオヤの光明の中に無上道に進むべき學園であります。あなたの御書中に、次の試みを待つといふ決心は必要であります。菩薩の願望に煩惱無邊誓願斷といふ事は活きて居る限りは、煩惱なる弱點は、決して根なしになる事は出来ぬ故に、日に新たにして又日に新たに、大ミオヤの光明の中に飽くまでも研ぎていたゞくことの覺悟なくてはなりません。また法門無盡誓願學と申して、實に大光明中に、一切の眞理を知るべき事は無盡である。之れを未來際を盡して悉く學び盡してこそ、成佛すべきといふことは、前途に望み無盡であります。いかなる場合も大ミオヤの光明の中に、勇ましく或ひは奮戦し、努力し、遊戯し、或は無上の法味を味はひ、または法喜禪悅の妙樂を享受し、心靈にミオヤの賜なる無上の妙味を飽くまでに受けて、而して靈の力

を充分に貯へて、力のあらん限り道のために努力して、終には一生奮闘努力の幕をうち揚げて、やがて光榮と靈福との光明永へに輝く御許に御引揚げに預るのであります。またあなたの至誠心は、大ミオヤの容るゝ處となりて、竟に御全家に御慈しみの光が照り渡ることになることにいたりしは、上なき悦ばしきこと。遠からぬ日、皆様に親しく御面會をなすことを樂しみ居り候。

先は御回答かたくかくの如くに御座候。

八十三

來る春もく同じ事を繰り返して居るやうなれども、年毎に變つてゐる。去年の學生は去りて、またかはつて新しき學生となつて來る。

さて無限の大宇宙に對しては、ほんの小兒のもてあそびの小でまりに過ぎぬ地球とは申しながら、此の表面に現はるゝ大活劇は實に千變萬化窮りなき劇を演じて居る。

是爾しながら

大ミオヤの御はからひより來れる一の大活動寫眞とも申すのでなからうか。

抑も地球が太陽より産出されて、産聲をあげてまだ眼も見えず何の働きをもできぬ小兒時代より、數千萬年にわたりて、此地殼に種々の變化を生じて、海と陸との區別を生じたのが抑も此の世界舞臺の序幕であつた。始めて水の中に産み出されたるアミバ底の生物から、幾千萬年の月年と幾百千の階級とを経て、ついに人間といふ神に似たる、神に假装したる男女の俳優が此舞臺に現はれた。初めはまだ是といふほどの技術も出來ず、猿見たやうな人間人間見たやうな猿猿樂師が室町時代の舞臺に出たやうなていたらく、されども猿役者として強ちに悔むことはできぬ、數千代に渡つて、彼等が不斷に勇猛に、努力し進化したる結果はまた人間らしくなつて來た。いつまでも野蠻的に喧嘩ばかりしてをりはせぬ。ついに文明の空氣を吸ふべき人間と進化した。

こゝに於て始めて、大ミオヤの理想は、そろ／＼實現せんといふまでに進んで來た

そこで大ミオヤは釋迦といふ分身を此世に出して、すべての子らに對して、大ミオヤの聖意を知らして、人生の歸趣すべき眞理を教へ給ふた。

良に惟んみれば、釋迦は地上に現はれたる彌陀尊である。此の一小球に出たる釋迦が全宇宙無限大なる中心の本尊たる阿彌陀如來である。

天にありては彌陀、地に出でゝは釋迦、大小異なりり雖も同一の大ミオヤにて在ます。若し大ミオヤの慈悲を離れては、我等は靈に活きる事は不可能である。仰ぎても仰ぐべきは大ミオヤの恩寵、常に信じ常に念じて、靈的人格の圓滿に成就せん事を期すべきである。

八十四

度々の御玉章に接して、あなたの信仰のますくお進みなさる事をまた甚深なる御志の程を聞く度に歡喜に堪えざりし。承はれば京都の市に、大聖釋迦牟尼の藍毘

尼園に於て御降誕なされた日に、光明會の悦びをあげた事は、實にめでたく萬歳を唱へざるを得ぬ。

更に又、光明婦人會の生れん事を理想に盡きつゝあるあれば、必ず實現の日早晚めぐり來ること疑はじしお言葉に、世に女程迷つた顛倒した暗の生活をして苦んでゐるものはないと云々。君よ、然ればこそ、彌陀は其女を特に愛し、また感みて、すべての人類を救ふ十八願に加ふるに、三十五願を立て、女人を敢へて飽くまでも、救はねば置かぬといふ聖意を表はしています。

また人は生れたまゝにて、全くして無缺ならば、宗教の必要を認めぬといふ事になる。女のその缺點が即ち、信仰によつて、又美點となつてあらはるゝことになる。さればそのすべての女子を擔うて光明生活に入るやうに、あなたはその使命を果さねばならぬ職務を命せられんとしてゐる事を忘れたまひを。

あなたのお望みの隨行といふ事について、今更改たまりて言ひなさらぬとも、昨年

の八月やぐつより一處しよに居ぬる事ことを氣きづきなさらぬとは、

とはいふものゝ、やはり又また、改あらたまりて良よき機き會わいがあらば共ともに修しゆ行ぎやうするもよろしき事ことと存ぞんじ候まう。尙なほ申まをし述のへ度たき事こと候まうへ共とも、後ご便びんにゆづり候まう。

八十五

上野武藏かうづけひさしにまたがり傳道でんだうし、昨日歸京まくだけ仕つかまつり候まう。御葉書おはがきに接せつし、御仰おほほせの如ごとく、流りう行かう感冒かんぼうは至いたる處ところに猖獗せうけつを極きはめ居をり候まう。風かぜの神かみを御宿おやどし申まをすと、頭痛づつうがするやら、熱ねつがで出るやら、咳せきが出るやら、それに反はんして、如來にょらい様さまを御宿おやどし申まをすと、有ありがたいやら、樂たのしいやら、力ちからある生命せいめいある生活せいかつをなし得えらるゝ。

流行感冒りうかうかんぼうの如ごとく、御慈悲おじひの風かぜが流りう行かうするならば、實じつに此世このよも極樂ごくらくと成なり來きたるべきものにて候まう。

八十六

聖なる斯光明我等が無明を攪きさまして、眞理を悟らしむ。斯光宇宙秘密の奥室を啓示す。斯光生死の中に涅槃を與へ。煩惱を轉じて菩提となす。凡夫をうつして聖者となす。

斯光吾等がなやみの中に慰安を與へ、罪惡を變じて正善となす。斯光心靈世界の太陽なり。斯光を肉身に満たしめて、釋迦牟尼と現はれ、キリストと現はる。月球は太陽の光によりて明し。若し人斯光によりて心靈を耀かす時は即ち聖者なり。斯光を知らざるが故に生死闇黒の中にさまよふ。

八十七

人生の一大事は一心念佛して如來大光明に接觸し大光明に依りて復活し恰も此

身體が太陽に依りて活ける如くに無量光明尊の大靈光に靈活せられ内心燃ゆる如くに靈に活きる處にあり。

念佛三昧とは眞黒なる炭に火がつきて眞紅になる時は炭と火とは一體となる。我らが煩惱の黒炭も如來の慈光に靈化して光明態となりて靈感極りなきを感ずるに至る。炭に火をおこさんとするに扇ぎて酸素をおくるに火微なるに風強ければ火遠つて消ゆ。之を扇ぐは火を炭におこさんが爲なり。我等が稱名は風の如く心に如來の恩寵を感ずるは炭の火の點じたる如し。若し火と風との宜しきを得れば火は益熾なるが如し。須らく知るべし。

八十八

いかなるばあいにもうるはしき色をかへざることを聖名によりてこひねがひ奉る。聖きみむねに安立しぬるころはむねのほもさえやすく、たきつせのごとく冷

しくいさぎよし。

八十九

欽啓かたじけなくみめぐみのなかにくらすことを感謝したてまつる。徳本上人が、

天はかさ地は足駄なり裸坊

胸は六字のみやこなりけり

西東南か北か極樂は

あみだ佛にまゝよやれく

おもしろやあみださまほどまんまるな

心かはらぬ人はないぞよ

みなひとよ十方衆生の願なれば

なむあみだ佛のまるのうちなり

九十

徳本行者の言葉の末てふ本に、こは行者のよみし歌をあつめたるもの、そのなかに
心行策勵のためによき道詠多かりし中にかやうなことをかきて侍りし。

逢ふてみたさは、飛び立つばかり、籠の鳥かやうらめしやと、いふ童謡にならひて
行者が、

阿彌陀佛逢ふて見たさは飛び立つばかり、籠の鳥かやうらめしや。

同じ自ら行者のかへし

誰とても籠の鳥にはあらねども

みだにこゝろのいたらぬゆえに

ばさちたちよ、この身につきての籠の鳥とて、左のみななげきたまひそ。たゞく
心靈の籠の鳥こそなげかざるをえざるではありませぬか。さればとて、行者がかへし

歌うたのこゝろをおもほへばそれとても誰だれをか恨うらむべき。また行者やっとうじやが、

たばこのむ身みと戀こひする身みとは、胸むねにけぶりのたえまない、といふを聞ききて、

あみだくと戀こひする身みには

胸むねにほとけのたへまない

同おなじく

戀こひしくば呼よんでいさんせあみだ佛ぶつ

程ほど遠とほけれどくちへくるぞよ

遠とほければそちへはゆかぬこちへきよ

あみだほとけと呼よぶぞごくらく

又またある人ひとに示しめされしとて、

地獄ぢごくとは鬼おにのすみける國くになれば、鬼おにと一しよ緒そに住すむは地獄ぢごくぞ

鬼おにや蛇じやをかくまひおいて何なににする、あみだ佛ほとけと云いふてせめ出だせ

鬼も出よ蛇も出よくと追出して、胸にあみだを住せてやれよ
 迷ひから地獄やがきはあるものゝ、十方法界みだのふところ

九十一

肅白。先日申上候廿八日より麻山の授戒會の砌りは何分御願申候。

貴地の青年衆の授戒會も引續き、二日より五日間勤めては、若し御普請の爲に日中御世話敷ば夜間にて宜敷哉と存候。今回の機を逸せば、又一年延引候。時人を待たず。改造の聲囂しき今日青年精神改造は何より急務の事と存候。尤も夜分は青年夜學の期節に候へば或は男子を日中にして、女子を夜間にしても何れにても貴地の便利に隨ひて宜敷願はしく候。

尙先日申上候麻山の法主の候補を意味して、山の爲に執事の勞を願はしく候。人は老期になりては何事を成候にも盛壯期の如くならず。今や御壯年の今日はなるべ

く有爲なる事に努力なされ候事を願はしく候。學園の維持についても、愚禰も出来る限り盡し候へ共、之れまた麻山の後任者の關聯を全ふせざれば都合宜敷からざる事にて候へば、是についても全力を竭して御助成を願はしく候。光明主義の宣傳に忙しく、麻山の法主を兼ねるは兩方共に不利と相成候間、麻山の法主の務は願はくば貴上人を煩はし度候。

又學園の經常及び維持費資金一萬圓だけは、兩三年中に愚禰の方にて盡すつもりに候へ共此の十分の一千圓だけ位を何かの方法にて助けられん事を貴上人より御盡力願はしく候。

愚禰の身の爲には在山中の食物の外には、一錢たりとも山のものにては、用立てざる事を誓ひ申し候。全く唯、世の爲、人の爲に老骨を碎く微衷に御同情願はしく候。先は當要如斯御座候。和南

肅復の御書簡廻りく、昨日拜見仕候。

(中略)

愚劣當講習會今日結了、夕方歸京候て明朝信州赤穂町安樂寺に五重に付き出張候。至る處に光明主義の信仰が開け候事は全く如來聖意の然らしむる處と深く感謝の外無之候。全く佛教家にして光明主義を以て青年子女を指導するに非ざれば國民思想狡猾利己主義の方にのみ走りて危なき事に相成候。

何よりも青年の宗教心涵養急務の事に存候。至る處の青年が水の低きに流るゝ如くに歸行するは全く時至れるものと存候。然るに吾佛教の傳道家之を等閑に付し置く事は頓て自己は世に捨てらるゝ自業自得の運命免れざる事と存じ候。

願はくば御地の青年の爲に如來光明中に攝受すべき御宣傳の程を希望に不耐候。餘は御面晤に讓候。和南

九十三

辨榮は世のため人の爲め己が身の苦しむを却つて樂しみ(略)

光明主義傳道各地に到る所大に流行することに相成り愚衲の身體も成るべく此の目的の事に盡瘁いたし度く、今日の處にては光明學園の方も今更中止も出來ず、傳道上のことは益發達するに隨つて費用も要する事多く候。雜誌、教會所其他傳道上の事は全く己が専ら全力をつくさざればならぬ事なく、これも財を要し候。

(中略)

合して本年中に爾後學園の外二千四百圓働らさ出して義務を果さざればならぬ事一に皆愚衲の軀の汗と膏よりしぼり出す外に道なき事是れも皆如來さまが御使ひ下さるものとして歡喜の中に職務を取り候。

九十四

世の中は持ちつもたれつにて候。中には或は辨榮に對して非難を爲すものあらん。なせとなれば學園などの餘計な物を立て人を煩はすと云ふものあらん。是れ人間の活役にて人間は義といふものを盡して見たい性をもつて、餘計に苦しみて義をつくして見たい而して他の人にも義を盡さして見たい。全く辨榮はいつでも只世の爲め人の爲めに己が身の苦しむを却つて樂みとしてをる。

其頃光明主義の大に發展するにつき種々の艱難と憂苦益湧出して來る。憂懼百出是己を研くの器として勇みて進みゆき候。

九十五

先日上諏訪にて御別れ申其のち少年會また他の傳道いたして一日當地に着して千葉上人其他の助力のもとに佛畫をつくりつゝあり候。

さて兼て申候事なれども更に改めて御勧め申上候。何事にも全く世の爲めま

た國の爲めに實利を爲し世を救はんとするには幾多の犠牲者を出すに非らざれば成り難きことに候。國の爲めに日清日露の役數十萬の犠牲を拂うて國運發展の業を成たり。いか成事も犠牲なしに實に世の爲め國の爲めに眞實の利を得たる例なかるべし。

日露の役にも幾萬の青年が滿州の野に於て忠の魂と化し去りしを知るべからず。就ては小林君よ、君當麻の里に生を受けり。當麻を中心として其の地方の精神界を開拓の爲めに爾後の生命を犠牲に供せられて欲しい。只一個の飯袋子（肉體）を養はん爲めにも働らかざればならぬ身、精神を一轉して地方の精神界の爲に犠牲と成つて勇ましく働きなば身心共に光明化せん。君若し至誠以て身を犠牲として學園及び無量光寺の爲めに供せば地方の精神界に於て大に發展する處あらん。縦令優婆塞にても決心して一方には本坊の執事と爲り、而して學園に従事して呉なば必ず興ることあらん。また他にも其至誠を感じて義を以て助くるものあらん。學園は本より義を以て起りしことなれば義俠を以て助くるもの、力に依らざれば永續し難き事と存候。君無量光

寺の執事となり極力寺の爲めまた園の爲めに盡して呉れるやうに一に是希望に不耐候。寺も節約して剩財あれば園を助け園はまた寺を助けて地方の精神界に供するなれば七年の後には必ず應分の効を奏することあらん。

今や光明主義は大に開けたり。こゝに於て有爲の材を成して國民の爲めに資するあるに至れば幸ひの至りに候。先は貴君の志を起しなざるやうにお勧め申すこと如斯に御座候。

九十六

大ミオヤはえもいはれぬ慈悲の笑顔を永しへにあなたの眞正面に向け玉うてまもり玉ふことをあなたは知りなされるゝことならむ。朝日のまばゆく輝くごとき慈悲の御面かげに接することのおもひのいかに靈妙なることよ。

あなたはあの觀世音ぼさつの尊像にこゝろをとめておがみなされるゝや。觀音ぼさ

つこの御頭の寶冠に一の御佛を常に戴いています。其御佛こそは即ち我曹が仰ぐ所の大
ミオヤなるあみだほとけにまします。

觀世音ぼさつのつねにみだ世尊を戴くことは彼のぼさつのころのうちにいつもみ
だ尊を念じて忘るゝことなく深くくみだ尊を尊崇し信念し給ふことをかたちに表は
して御頭にみだ尊を戴いていますなり。

あなたもころに常にみだ尊を尊崇し信念して忘れざる時は、あなたのお頭にみだ
尊は常にましますことになり申候。世間にて人の心は頭惱にありと。されば心に如
來を憶念して忘れざる時は如來はそのひとの頭にやどりますことにて候。さればその
人は活ける觀世音ぼさつにて候。

九十七

時しも七重八重に相競うて咲匂ふ梅も櫻もこれ如來法身のみちからとみめぐみに
依るものと信する時はなまめかき色香を眺むるにも一しほ床しく感じられ候。

如來慈悲の聖容をしたゝめて送附仕候。

雲中の聖容は本慧心僧都も圖せられ基督教（天主教）にても天の父即ち神の聖影として多くは半身の圖にて候。是の圖は如來大慈悲の眸を衆生に注ぎ玉ふ處の表相にて候。聖善導は

衆生口に佛を稱れば彼佛之を聞玉ふ。身に敬禮すれば佛之を見玉ふ。意に念すれば佛之を知り玉ふ。衆生佛を憶念すれば佛もまた衆生を憶念し玉ふ。彼此の三業相捨離せず故に親縁と名くと。

九十八

さておもふに我國民の知識は已に長足の進歩を以て今日に至れり。宗教によりての道徳的精神の方面を發展すべきの運に向へり。我國民の心靈を照すは如來の光明なり。今回四國に初めて傳道を試みしに

如來は傳道の保護者、渡部君を選び出して四國の人の爲に曙光を發し給ふ。

如來の聖旨を感謝し奉ることにて候。願くば世の爲め人の爲に如來の光明宣傳

の保護し給はんことを祈候。

先日の御禮かたぐ、如此御座候。和南

九十九

肅復殘暑未だ熱さを覺へ申候。おもふに此熱さは私共のすべてが一年の命をつ

なく稻（いのちのね）の果實をよく豊稔しめんが爲の、大ミオヤさまの御惠のあつき

より日光の熱と現れたものなれば熱さのつよきほど御惠みのあつきことにて候。若し

今日の約一五 熱さに全國に於て米の增收幾百萬石の利と成るものならんと存じ候

へば熱さはありがたき賜にて候。

さて禱きに御地に出て候。砌は厚き御供施を 受し、また今回爲替券を以て御信施

を辱うし御芳志厚く感謝候。實は光明會いまだ幼稚ながら傳道部教育部に分ち
 教育部を相州（神奈川縣）高坐郡麻溝村無量光寺（一遍上人開基の寺）に光明學園
 なる準中學程度の學園を設立いたし、昨冬認可學園と 一には地方青年の精神を宗
 教的に養ひ風教上改善の目的を以て設立せしに元より資財產生の道なき處に愚禰傳道
 の暇に佛書を作り之を有志に配布し之が報酬あれば其維持資に充つ。此志を發すや
 義侠に富める道朋千葉秀胤師より愚禰の志を賛成し丹彩の勞を助けられ候。此度の
 御芳志維持資に備へ申候。御好意に對して深く感謝候先は御禮旁如所御座候

百

右學園は一は主義傳道者の爲め一は地方青年思想改善の目的を以て設立する準中學
 程度の學園なり。本より資財なき禰子の發起に係るものなれば愚禰傳道の暇佛書を描
 き之が報酬あれば其維持費に宛つ。今回折角の御芳志、園の資財に備へ申候。

聖きみむねにきよめられし吾同胞また愛友なる清水たね子君にまで啓す。吾はまことにく

ミオヤのみまへにアナタの眞正なる幸福をいのる。其後はうち絶て御無音に過したりしは忘れしにはあらねどもこゝろにかゝりつゝもついに。

種子君よこの頃爛漫たる光や馥郁たる好芳をもてあだし花桃や櫻の意なき有機物にまでも

ミオヤの光榮を表はし玉ふにありませぬか。

ミオヤの威力と恵とはいかなる處にも遍なく充せ玉へばかの麗しきいろ馥はし香もみなその賜ならざるはないのでありませう。

ミオヤの御恵は外界いたる處に存在するごとくに、また人の心の内にもわたらせ玉ふ

なるに、いかなればわれらが聖き靈の花は開かざりしにやと。

そは吾らは桃や櫻などのやうに天真爛漫にして毫も私の心を挿まざることが出来ぬ故に自然にミオヤの聖意と遠ざかりてために靈の花は咲き初めぬにもやとあなたを恨むもまた己を責むるもみな己が愚なり。

本よりもあなたの御慈悲の光は天地に充ちたる萬物にたち超て宇宙にみたしめ玉ふとはさりとはしらずで己がころにあざむかれて自ら無明にさまよひしなれ。

なれども慈愛ふかき處の

ミオヤは吾らを愛しまことに憐玉ひて、絶對的なる大の御めぐみを表はさむが爲に聖き名によりてわれらに與られ玉へり。

われらがまことにふかく信樂し、ミオヤをミオヤと愛し奉りて己をさへげて信念するときは、大なる慈しみの光りはわれらが黑暗を照破して救ひ玉ふ。

無量光と壽なる聖名にあなたの聖旨はましますせば、我らはまことに光と壽を信

じ奉つりて、専ら憶念し、念々に相續して止まざる時は、ミオヤのあたゝかなる春風
和氣は靄々としてわれらが靈に感じ來り、我靈の花は綻びぬべし。靈の花の麗しさは
日月を雙べ照せるごとく、天地にも充ち溢るゝばかりなる歡びのほど、世にたとふも
のやあるべけん。而してその靈き花は桃や櫻の幻のしばしのそれとは異にして、一
たび開きぬれば、無量永劫に盡ぬいろ香の光榮はまたなきめでたきものぞかし。さ
れば、

一たび開きてとことほに

かはらで匂ふはかぎりなき

光りによりて咲きにける

靈き心の花ならめ

百二

われらいと尊き獨りのミオヤ在ますとはかねて聞たりしも、無明のために目しいて、本覺のミオヤに背き、罪に没びてあさましき身とはなりしも。

ミオヤの慈悲のふかければ、我らは己がつみを悔ひあらためて一にミオヤに歸命し奉らば、

大なるいつくしみによりてわれらは罪よりゆるされん。

慈愛ふかきあたゝかなる御手をかけさせられ、我は汝が父なりとの汝聖子よとの聖きみこゑに無始の無明の夢さめて眼をふりさけ瞻れば、

大なる慈愛は満面に溢れ玉へり。そのときに、(心靈の事をかたちに表示したる)

ヲ、吾眞のミオヤよと攝取の聖手を握り奉り、

ヲ、吾愛する聖子よと聖なる接吻は愛のきはみを示し、まことにくミオヤと聖子との、聖なる血を別ちたるしるしぞいまはしらるべし。

これよりはミオヤと共に起き共に寝ねともに行き共に住しまた離るべきことをなま

たとへば我この身を二つに割いては肉がいきること能はざると同じく、靈はミオヤを離れて活くべきものにあらず。

種子君よ、

聖なるミオヤをミオヤと呼ぶことをえてはじめて御互は靈によりて同胞たることをうるなり。

あなたが聖懷に安住すると共に我もまた聖懷のうちに安立す。オ、なつかしの聖なる同胞よ。

種子君よあなたは光明歎徳文を日々に御讀みなされ玉ふや。

願はくば彼の十二の聖光によりてますます靈なる生活なし玉はんことを。

百三

齋みて復しまゐらせ候 御來問の義は實に人生の一大事なれば篤と御求めに相成

候て確かと御安心成され候よう御すゝめ申上候し

御質問の佛教要理問答の第三に啓示の恩寵云々の内、如來相好光明等を感じすと此に就いては宗教心に智力と感情と意志との三面に互りて、知力には啓示とも又キリスト教には默示とも聖靈感ずとも申し、佛教にては佛知見啓示開發とも名づけ候。蓋し心眼開發して佛の相好とか又は光明とか又は淨土の莊嚴などを觀見し、又は無生忍をさとり、又は慈悲喜捨諸の陀羅尼を得、また禪門の見性等の類、此らを啓示と申します。此は三昧定中に觀見する實驗であります。此らを知力のさとの信仰とす。

次に感情の信仰とは、如來の御慈悲を被むりまた大慈悲心を我が心と融合する處にえも言はれぬ妙味を感じ、内心の歡喜妙樂、またありがたき感じ等はすべて感情の信仰と申します。

次に意志の信仰とは悪心が轉じて善心となり、不道德情操が道德心となるのにて、是如來の光明に靈化したる意志の狀態であります。

元來完全なる宗教心と云は知、情、意、の三面に何れにも互りて如來の光明生
活に入るのが立派な宗教心であります。

蟪蛄臨終の云々。此は狐のわざと申す。狐のわざは肉眼にて見ゆるので眞實の佛境
界を觀見するのは心眼であるから、閉目開目に若しはぼんやりと若しは明了に見るこ
とが出来るのであります。兩つは別であります。

釋迦如來の大乗佛敎は概して三昧觀見の状態から説示したのであります。
眞宗の宗教心は感情の一面にのみ重きを置きて、知力の方の啓示即ち如來の相好ま
た光明を觀見する等の事は凡夫のできぬ處として、其方面は隠して置くのである。感
情の歡喜と感謝のみを重くするのである。

例へば太陽に光線と熱線とあり、即ち明りと暖みがある。中に於て眞宗では太陽の
光線の方を見ずして只太陽の熱即ち慈悲のあたゝかな中に悦び且つ感謝して居るので
ある。故に如來の智慧の光明より現るゝ佛の相好を拜むとか、また悟入するなどと云

ことは眞宗では隠してをる。蛭川の話などは啓示のそれとは例すべきのではありませんせ
ん。

佛の光明と云ふ事に就ては、大靈の光廿四頁より廣く光明の義を説明いたし候。

太陽の光と如來の光とを比例せば

如來 太陽

知 慧……………光 線

慈 悲……………熱 線

靈 化……………化學線

太陽の光は物質界を明るくする。如來の光は知慧なれば心の明りである。

太陽の熱はあたゝかである。如來は慈悲にて、人の苦を抜き樂しみを與ふるあたゝ

かみである。

太陽の化學線は柿の實の澁きをも干柿にすれば甘くなる如く、如來の靈化の徳にて

人の心の煩惱の澁をも化してよき意として下さる。

光明に三の能がある。またこまかには十二光明の下につきて抜き玉へ。

二月一日の夜不思議の事云々。其靈感の如きは全く如來の示と信じて信仰心向上の動機と成る事になれば宗教上の事實として然りと信じ候。實は信偽は現はれの何より信仰心のいかどにあります。眞實の信心なれば皆靈驗が眞實なのであります。

百四

如來は宇宙の唯一の大ミオヤなれば、宗教心は慈悲の大ミオヤを信じて、親子の最親密なる精神上の關係を成す處にあり。眞實に如來は大ミオヤなりと信じ、また深く愛し奉りて、念々相忘れざる時は、大なる光明は吾人の心中に輝き、大慈悲のあたゝかみは吾人を覆ふて安隱ならしむ。

現在を通して永遠の生命として全く如來の光明を獲得して如來の眞を得る時は身は

娑婆に在りても神は淨土に栖みあそぶの感じがある。

日々朝夕觀音經心經等を讀誦す云々。

何れにしても朝夕の禮拜は自己の靈を養ふ處の糧なれば全く自分の心がありがたく感じらるればよろしいものゝ、愚劣の信仰は斯ようである、

宇宙の大ミオヤは唯一りに在ります。即ち十方一切諸佛の本地なるアミタ如來にて、其心靈の大ミオヤを信念する時は、私の心がアナタの靈的光明に常に養はるゝ故に我が佛性が漸々に増長して眞の佛子と成りて、光明の生活と成るのにて、朝夕の禮拜は恰も朝夕の食物にて身を養ふのと同じ事でありませう。活ける靈力が天地に充ちてあれば、私どもが南無あみだ佛と唱へて信念する處にうけつゝ靈性の生命が生活して居るのであります。然して信仰彌々進むに随つて念佛の妙味を感じらるゝ様に成りますればとて唯如來大悲の親様を確かに信じたる上には、常に憶念と申して心の中に親様をおもはれつゝある事になるのであります。

それには矢張り一の的を確かと立て、其親さまをたよるのが最勝れたるみちであります。

天に太陽の照しつゝある如くに、親さまは我らが心靈を照しつゝあるのであります。私は太陽を通して慈悲の親さまを信念して居ります。寝てもさめても親さまとは離るゝ事はないのであります。

尙くさく申述度候へども後便に譲り候。

百五

如來の聖なる名により聖旨を得るやうにつねにいのり玉へ。

如來は一方より拜めば宇宙にみちわたる智慧と慈愛の光明ばかりなれども、また一面より觀すれば萬徳圓滿の麗しきみすがたをそなへたまふ。

百六

如來の聖旨をうる人はいける觀世音なり。たね子のきみよ。いつもみめぐみによりてうるはしき色を變せざるやういのり玉へよ。

百七

肅白、曾て本山講習會の折、御令父御病氣と承はり、歸途御訪ね申上度存候内追々巡教延引となり、時間通り、歸京候て竟に不得其意、昨日歸京仕候而承はれば、十四日午前竟に御西逝なされしとの御訃音に接し、甚だ遺憾に存じ候。

就而御一族衆の御哀慟之程察上候。良に生者必滅は娑婆の習、會者定離は此世の掟とは知りながらも、今更の感に打たれ候。

併しながら、此の有爲の身を受けてよりは、大聖釋尊さへも鶴林の雲に隠れ、赤梅檀の煙に化したまふ。されば何人も一度生を受けたるものゝ免れ難き常則とは存じ候へども、愁傷の禁じ難きは、之れまた、情の遁れ難き事と存じ候。

然れども、御亡父生前中篤き信佛家、殊に念佛して念を後生に懸けなされたる至誠心、彌陀の本願に契ふて、九品蓮臺の中に神を遷したる事は必せりと信じ候し、就いては、御遺族の衆より、籍を淨土に轉じ給ふ御亡靈の爲に、専ら名號を稱へ候はゞ、如來の光明に依りて、早く蓮華の臺も開け、見佛聞法の日もまた速かならんと信じ候。願はくば、追孝報恩の志を以て、光明名號を稱へて、御亡父に手向けなさん事を。尙更に進んで御勧め申し候ことは、皆様の信念いよく増進せられん事を。

此頃の田圃に繁り茂れる稻は太陽の光熱化によりて長養せられ、念佛衆生の心は、彌陀如來の智慧慈悲と靈化との光明に依りて養はるゝ。米の實のよくみのる如くに信念の心が良く實のるなり。

人生の一大事は、人々の精神に實のる處に、全く人格の價値もあるなり。いかに榮耀榮華の中に百歳の壽命を保ちても、若し心靈に麗はしき實のりなからば將た何の詮かあらん。

寢ても覺めても、如來の御慈光に養はるゝ心のきよきよきみのりを全うする爲に、念佛となへ申すことにて候。願はくば、人生の一大事自分々の頭腦に心靈のいよいよ堅くますます貴からん事望ましく候。

百八

すんぐりと時間は過ぎ去つてしまふ。一日々々に暮れて行く、今年も早や僅かばかりになつてしまつた。而して暮れになれば忙しい忙しいと誰もかれもかちごことをいふて居る。全體人間は何の爲に生れて來たのでせう。食ふては寢て、寢ては起き、毎日々々同じ事を繰り返し々々してしまひにはどうなつてしまふのでせう。年は暮れても、また新しい年はくりかへして改めて來る。我々はからだはどうなつてしまふのでせう。

世間の人はどう思ふて日々暮して居るのでせう。唯々貪瞋ぼんのうの爲に暮してし

まつて、自分は何の爲に生れて來たのでせうか、遂にどうなつてしまふのでせうなど
いふやうな人生問題などと云ふものを自分で自分の目的が何とも思はぬのでせう
か。是れ程人生の一大事の事はないのに、それには一向無頓着で、ほんとうに一休和
尚のやうに悟つてゐて己の大事もへちまもかまはでゐるかと思へば、なか／＼さうで
はなく、胸のうちには一寸も休みなしに、それからそれへと、心はあせつて而して
もだへてゐるのである。

天地から借りた借物であるからだを全く自分のものと決めこんで、おれがおれがと
寝ても覺めても、おれがにほだされて、己の身の上をかへり見で暮してゐるけれ共、
此のからだをかしつけてござる天のあなたの方ではもう大晦日も近より、誰々はもう
何年たてば、あのからだを取りうばつてしまはうとチャンと毎年々々毎日々々かぞへ
られてゐることとも知らで、いつまでも自分のものであるから、安心であると思ふて
居る。

流行感冒で若い人が死んだと、聞いても死ぬといふ事はよその人にばかりあるの
 で、自分の身にはまだく千年も後のやうに思ふてゐる。全體人間は何れから出て來
 たので、いかにしたならば眞理にかなふ人生を果すことが出来るでせうと思はで、ほ
 んとうに聞きより聞きに入つてしまふものばかりである事を思へば、實にかあいさう
 でたまらぬ。それでも其人々の心の底には、大オヤ様から與へられた處の佛性とい
 ふ淨いく尊いく金剛石よりも尊い靈の玉を持つてゐる。然るにちつとも貴重な寶
 石とは見えぬのである。

さてこゝで折角の人間に生れても、天地萬物のあらゆる佛や神の大本の大ミオヤを
 知らで、人生を空しく過すことがいかにも氣の毒でたまらぬ。どうかして、すべての
 人々に大ミオヤ様を知らして、ミオヤの光明の中に、おや様の光明に依りて、きよき
 人によみがへり、人生を永遠にまで、光明に依りて活ける眞の人々にせん爲に、即
 ち光明會は大オヤ様の聖旨を世の人々に知らしめん爲に、世に出たのである。

若し大ミオヤの光明にあふて、心靈が卵のやうに信仰の目鼻がついてくれば大なる親様の御めぐみを被りて、日々にありがたく楽しく日暮しをする事が出来る。此頃の田園の稻草のやうに、稻は一日々々に枯れて行く死んで行くけれども、稻に結びたる實は一日々々にいきて来る。なせなれば稻の果もまだ初のほどはみのらぬうち、いのちがないのであるから、よしや來春になつても播き附けても芽生へぬ。よく充分に實熟すれば、いのちがかたまつたのであるから、播けばきつと芽生へる。稻の實は天とうさまの光をうけてみゆる。我々のからだも稻のやうに、一日々々に枯れてゆくのである。それでも大ミオヤ様の光明を被りて、念佛の衆生となれば、心靈が充分に實熟つてきつとお淨土に生るゝやうな魂の實を結ぶのである。

願はくば皆々様よ、大ミオヤの光明の中に、眞實に主義のある價値のある生活をなして今年を送りまた來年もますます實のりあるやうな日をくらすべき新らしき年を迎ふるやうに御すゝめ申します。先づはあらゝかくの如くに御座候勿々。

つらくおもへば端もしらぬむかしより、めぐりくつて、いつをかざりと末のわからぬまでに、めぐりつゝある、此の球の面に生れ出し此身のちざり、我々の愚かなること、絶へずめぐりつゝある球におく身の、かならずや、ふり落さるゝわが運命を、さまでにこゝろにもとどめず、とはに朽ちぬ玉の緒をもて、いともいともかたく繋ぎけるものゝやうにおもうて、けふも空しく暮し、今夜もいたづらに明しぬることのあさましさ、能く己が身を省みれば、めぐる球の上におく身の上には、この球にさゝがにの蛛の絲ばかりなる緒をだにつなぎかねたる我が身なりとおもはぬことは、今更ながらに愚さにあきれておかし。笑ふのも我なれば、笑はるゝものもまた我にてぞ笑ふ我と笑はるゝ我とは何れを主としいづれをか客といはむ。あなおもへば怪しさいはんかたなく、おかしさあきるゝばかりにぞ。此愚さをいまさら悔ゆとふ甲斐なきこ

と。よりは眞面目に球にはふり捨てらるゝとも、永しへに救ひの御手にかゝるべきみちを求むるにしかじ。つなぎとめもならぬめぐる球の上に、さりともしらで、頑是なく、たはぶれ遊ぶ子を、あはれにおぼし召したまふ大ミオヤの慈悲の深き御恵みで子らがために攝取の光なる御手をのべたまふ。我らひとへに大ミオヤの御名をよばふて智慧のふたつの御手にいだかれて、永にすくはるゝことの出来ることを聞きはべりて嬉しさいはんかたもなかりき。こゝに於てめぐる球の上でありながらも、はや攝取のみふところ住居なることを信認するにいたりて、はじめて安き思をえたりき。世の同胞たちの、いまだ救の御手をたよることもなく、危き身を自らさとらずして居りしことこのいたはしさ、この球の面にたはぶれる子たちが一めぐりに幾千萬をもてかぞふるほどにふり落さるゝをおもへば、げに我が同胞のために傷しさいはんかたなく覺え候。されば我が同胞たちに大ミオヤの攝取の網にすがるべきやうに、明けても暮れてもこれのみは忘るゝ能はざりき。

吾きよき同胞なる高崎のさとおはす長澤家のきよき兄弟姉妹までにまをす。先つ頃なかく御心づくしの御もてなし唯感謝の外之なく候。またかむ子様には上野にて御わかれ申候て雨などふり候へば定めし御道すがら御困難なりしことならむと存じ上げ候。尙くさく申のべたき事多く候へ共またのたよりにゆづり申候。

百十

生者必滅は此の土の掟、會者定離は人界の習。一度此界に身を受けたる者誰も此數に洩るゝことを得ず候。されば權化の應身釋迦如來紫磨金身もついに娑羅双樹の下に滅を示し金剛不壞の御肌も赤旂檀の煙と消え玉へり。承れば御老父君には廿九日有爲の穢土を辭して無爲泥洹の都に逝き玉へりと實に哀悼に耐へざる處。爾れども御生存中。

大ミオヤの大慈悲を仰ぎ本願の御名を稱へて心を彼岸の都にかけ置しことなれば、

限りある人界の生を辭したりしも彼の法性常樂のみ國に往きて九品蓮臺の上に生れ
て

彌陀法王に見え奉り

無上の妙法を聞いて

無生忍のさとり得ること遠からざるべし。

願くば御遺族のみなさまには先立玉ひし御亡父君の亡靈彌陀大光明の中に攝取せ
らるゝやうに専ら彌陀の名號を稱へて御回向せられんことおすゝめ申上候

彼の淨土に生れて

彌陀尊を瞻み奉れば

金山王の如く相好圓滿に光りて

御慈悲の眸に悦びをたゝへたる御すがたを見奉れば

何ともかたじけなさに落つる涙もとどまらじ。と惠心僧都は讚し玉へり。

また彼の淨土に生るれば

三十二相備はりて相好端正殊妙なり

三明六通さとり得て心の如く自在なり

先は御弔辭まで如此御座候。和南

百十一

良に惟れば人世の無常なる時光遷流して須臾も停らず夢幻泡露の世に處して刹那も自由をえず候。

善導大師無常の偈に曰く「人間忽々として衆務を營みて年命の日夜に去ることを覺らず、燈の風中に滅えなんこと期し難きが如し。忙々たる六道定趣なし、未だ解脱して苦海を出づること能はず、云何んぞ安然として驚懼せざる、各聞け强健有力の時自策自勵して常住を求めよ」と實に恬み難き世なる哉。

先に先考の逝去を驚き次でまた先妣のきみの訃電に接す。昨冬御別荘にて來春の再會を約す未だ數ヶ月を経ざるに既に再び溫顔に接することを得ざるに至る。御考妣の慈顏彷彿として目前にあり。之に對して

大慈父の聖名を稱へて大慈光に攝取せられ、彼の無爲常樂の淨土に生れ見佛聞法して疾く無生法忍を悟り神通圓かに照して遺族の追考を照鑑せらるゝやうに祈り候。

御全家の御心中御察し申候。願くば唯、大ミオヤの慈悲を仰ぎ懇ろに御手向けなさるゝやう。

御母堂様は流感との事、其後皆様には云何。感染なされし御方は御座なく候哉。實は愚衲も智恩院を濟し寸陰なく大阪に將下りてつとめ其折四季の風に襲はれ無理ながら福井に夜行にて續きて靜養の暇なく、また當地に來り竟に無理計りするもの故まだ全快と云ふにいたらず、然れどもはや憂ふるに足らずと存じ候。當地も五重相傳なればかはる人もなき故晝夜兼行と云ふやうな事。漸く少しの時間を捉へて御追弔申上

候やうな次第にて候。もはや全快も近きことなれば決して御配慮は下されまじく候。先は御訪弔まで如此御座候し和南

百十二

肅白時暑接近し炎熱酷敷候折、

如來慈光の裡に御全家益御多祥の段大慶此事に候。却説今回は不思議なる御因縁に催され、宿縁深厚なる御本家は云ふに及ばず、御一門の皆様に通今世を通じて永遠にまでの眞理を以て契縁を結ぶことに至りしは、愚納はまたなき欽喜に存申候。今

回皆様に初めて御面會に及びしこと實には
宇宙唯一の如來なる大ミオヤの源に遡りてみれば皆様とは切りても切ることの
出来ぬ心靈上の同胞にてありし。然るを御互に無明の闇に覆はれて自ら識らずして久
遠劫より過ぎ來りしを、今は幸に釋迦佛陀の教の光に照らされて唯一の大ミオヤの在

すことを信じ、殊に四海同胞の中にも正しく大ミオヤの光明に浴し、同じく大悲の法乳をわけて、日々に靈性を養はるゝに至りしは實に御互の幸福とよろこび居候。唯願くば中條にあるきよき吾同胞衆の彌光榮あらんことを祈候。

御一門の皆様が同じく光明の生活に入り益々信念の彌増さんことを望む。それにつきて一の願はしき事御座候。そは他ならず今回本月廿三日より五日間小知谷勝壽寺に於て淨土宗寺院の催にかゝる講習會を開きて愚衲は縣内宗敎家の爲に宗敎の最要なる眞理を説きて宗敎家の靈的要素を頌ち而して一般の人民に宗敎の眞理を味はしめんと欲す。普通説敎また講習とも異にして正しく専門家の爲の講習なれば要中の要を講説す。願くば此好機會を以て篤信なる庄輔君の爲に此講筵につらなり宗敎の要領を了解し、それを以て要素とし御一門は勿論の事中條町の有縁の同胞衆に光明生活の道傳ふることに至らば實に幸の事と存じ候。御多忙の中に五日間を投ずることは實に容易ならぬ事に候へ共、然れども精神土の大利は永劫の基に相成候。願くば皆様の

代理として庄輔君を聽講に御出し下さる事に相成候はゞ宗教上の幸甚と存候。願くば萬障御差繰り此好機會を失はざるやうに望ましき事に存候。尙皆様に此程は一方ならぬ御心づくしの響應等にも預り候へ共こは心靈上の御供養物を以て報酬せんと欲す。それにつきても庄輔君の御出を願はしく候。先は御禮かたぐ御勸までに如此御座候。頓首。

百十三

肅白。殘暑尙酷敷熱さに候折御全家益御清祥萬福奉賀候。愚納今關西地方に罷在候。本十四日歸京の途に就き申候。時にシベリヤ方面の風雲の變につき帝國出兵の運に至り候やう。就いて本春來の御話に何時御出征に相成候哉と御覺悟の由承り及び候。今回云何に相成候哉伺ひ度迄に申進め候。

阿彌陀經に、彼の佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する所なきを以て阿彌

陀と號くと。若しは彼方に征し若しくは此處に在る何れも同じく

大ミオヤの智慧と慈悲と威神の光明中なれば光明靈化の精神を以て若しは國の爲め若しは家業のためにも奮闘せられんことを望み候し

さてまた此頃の熱さにつきての所感も、

全く此の熱さに我國の民草のいのちをつなぐ稻の實のりを充分にせん爲の、

大ミオヤの御惠のあつさが今日の熱さとすれば、熱さのつよきほど大ミオヤの子らをもぐみ給ふ御いつくしみのあつきなりとおもへばあつきことこそありがたく感じられて候し

大ミオヤはこの形を養ふ爲には日光をもまた天地のすべての備をもて惠み下され、心霊を養ふためには、

無量無邊無碍等の光明を以て衆生の内面を照し玉ふ。仰ぎて如來の光明を讚歎し伏して大ミオヤの慈悲を禮し奉り、此身のあらんかぎりはいさましく聖旨に仕へ奉り後に

は永遠の光明かどやくみもとに詣うでんことを期して先は御窺ひまで如斯御座候。勿々頓首

百十四

所歸の本尊と申すことは宗教上最も大事なることに候。所歸とは我等が此生命全幅を献げて歸命信賴すべきの義にて、我らが全生命はいかなる尊神に投歸して、我等を永遠の生命とし圓滿なる人格を完成し玉ふ増上縁と爲るをいふものぞ。此歸命信賴すべき尊格はいかなるかたにて候となれば、我等が無知なる唯三界の導師釋尊の教に隨ふ外に道なし。圓滿大乘の教主釋尊教へて曰く、全宇宙法界に絶對的に尊き絶對人格の尊神在す。阿彌陀と號く。彼如來威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所、十方三世一切諸佛も彌陀の光明を獲得して竟に正覺を成す。一切の菩薩は今現に此光明を受けつゝ竟に成佛せん。(般舟三昧經の意) 宇宙に絶對の大靈尊

神なる如來が、此世界の方面は、先づ太陽を中心とし、太陽より地球等を發展し、太陽は常に地球に大なる力を滌ぎて萬物を養成す。我等衆生の肉體の生命に對して萬物の設備なければならぬ。けれども先づ太陽を以て中心根底として我等は活かされつゝあり。太陽を第一として我等が此肉の生活の歸趣する處の目的は、心靈を開發し人格を養成し永恒の生命常住の平和なる正覺を成じ大涅槃を得るに在り。絶對なるミオヤは我等衆生を心靈的に永恒の生命と圓滿なる靈的人格を養成せんが爲めに、大心靈界の太陽として絶對界の中心本尊として、無量光如來として、智慧慈悲の光明普く十方世界の精神界を照し玉ふ。此光明に攝められて心靈が靈化せらるゝ時は、永生の大光明界に歸趣することを得。絶對界より此相對有限の世界の方面に衆生を生産するは、先づ太陽を根本として地上の生物の形體を養成し、劣等なる生物より漸次に進化する、竟に人類と爲り、人類にして始めて終局目的なる精神の靈的生命として、絶對なる本覺清淨の大光明界に歸趣することを得。靈的人格を成就せしめん爲に、無量

光如來は精神世界の太陽として十方を照臨し玉ふ。若し人終局目的なる圓滿なる靈格となり、永恒平和の大光明界に歸らんと欲せば、無量光如來の大光明を仰ぎて、此靈的光明に攝められて同化せんことを信念すべし。無量光如來は常恒に絶對人格の神尊として我等に照臨し給ふ。我等光明の名を稱へて光明靈化を仰ぐ時は、我等の心靈の金剛石は頓て琢磨せられて、彌陀日光の反映することを得ん。彌陀の日光は常に照せども我等が一心の金剛石が未だ琢磨せざるが故に反映せざるなり。彌陀の日光は常に照せども動物的心は瓦礫の類にて反映せず。彌陀の日光は人類の中に就て靈性の金剛石に能く反映す。視よ古來靈界の偉人等の靈的人格として威靈の光明赫々たるは、皆彌陀日光の反映せる處の人格光明なり。古往今來宇宙の大真理は常恒不變なり。一心の金剛石の琢磨せば彌陀の日光映寫すべし。若し人自性の寶石を磨かんと欲せば、念佛三昧を以て用ひよ。金剛石は灰や泥を以て磨くべからず。心靈の金剛石は普通の倫理道義の灰や砂を以て磨くべからず。唯念佛三昧の金剛砂のみ能く

一心の金剛石を琢磨することを得ん。人生の一大事永恒の靈的光明なる人格たらんと欲せば、須らく念佛三昧の妙法を以て自性を磨き玉へ。是一に渡邊家の諸上善人菩薩衆に勸告し申す所なり。尙次便に譲り候。和南

過日御話し申上げ候座禪功の家より參詣に來る者あり御家に御送り申していつか御試を願ふ迄に爲べきやうに申置候間、若し送附仕候はゞ御試に賣弘め下さらんことを願ひ候。此發明人は已に十三四年前に歿して愚禿の信者にてありし。今申すは其女にて夫は教師をつとめ自らの主掌の下に工女を使ひて製造いたし居り、女子の事故發展の手段も出來ず、還つて模造品の方が今日では手廣く用ひられ居り候。今申すは父歿後親戚の中にある惡漢の爲に遺産をも損害せられ、非常の困難の中を自ら奮つて、女子の纖弱なる腕を以て回復の爲に努力し、今日は稍復舊のすがたに相成り候。

其中に於ても其奸策者を罪におとさしめず、自らつとめて回復の道をつくり、人を恨まずまた咎めずして、自ら奮勵したる精神に於てかよわき女子としては實に感すべきものに候。願くば此軟弱なる女子をたすけて彼等の業の發展すべきやうに御保護下さらば幸のことに候。若御上京の砌今は依隘の家に居り候へ共、御訪ね下されて何とかな發展の策を教へ下さらば辱き事に候。實は愚拙も其亡父歿後十何年目にて先頃久しぶりにて訪ねたる時に父の死後の親戚より蒙りたる災難の事を聞きたるやうの事に候。

先頃來伊勢大廟を始め諸所御巡拜御無事に御還り被成候由隨喜の至りに奉存候。

百十五

念佛の念と云ふ字は（人二心）二人が一と爲りたる心である。佛と我と二人が一となりたること、また我が心に佛が離れぬと云ふ意である。例へば此肉體に於ても獨身

の時と結婚してからは違つて来る。若し男が婦に對して妻と云ふは心のつまにかゝつて居るから妻といふ。妻の方からも我つまさま等と云ふのは婦人の心のつまに常にもつて居る故である。然れば即ち結婚してからは心の中に二人が一に成りたる念頭にかゝり来る如く、靈性に於てもまた然り。

宇宙唯一なる如來に歸命したる上は已に如來と我靈と結婚したるなり。然れば我心の妻に如來存在して離れぬなり。故に念佛心と云ひ、我と佛と一處に居るすがたである。我心の内に如來の慈光常に燃えつゝあるから我は如來の有にて如來は我が有である。諭を以てのふれば此の寒き中すべての人に愛せらるゝ火鉢の中の炭火を見玉へ彼がモト炭箱の中に獨りで居る時は眞黒な顔をして而して冷たい物であつた。それが火鉢の中に入つて火と結婚してからは昔の眞黒などはかはりて彌生の桃の花よりはもつと紅の色を呈し而してカンクといかにも快然として火鉢の中に活躍して愛嬌なかほして近づく人々をあたゝめて居る。曾つて炭箱の中に居た時分誰も手を觸るゝこ

とさへ厭いとうて居まりしものが今は反對はんたいに何人なんびとも火鉢ひばちに手てをもつて行ゆかうとせぬものはない。之これ然しかしながら炭すすと火ひと一いっしよになつてからである。

念佛ねんぶつの念ねんと云いふことは之これと同じやうである。私共わたくしどもの心こころは本もとと煩惱ぼんごうの炭すすであるが如來にょらいの慈悲じひの火ひがつくと衆生しゆじやう心が佛光ぶつくわうに同化どうくわせられて衆生しゆじやうの心こころに佛ほとけは常つねにあり。さればむかしのそれとはかはりてたとひからだは此こゝの寒まひさにせめられて居まるにもかゝはらず心こころは大慈悲だいじひの光ひかりにあたゝめられて炭火すすびのやうに成なるを念佛心ねんぶつしんとは申まをすなり。如來にょらいと共に在あるゝとこれなり。あなかしこ

百十六

肅つししみ啓まをし上げ候まをさふ。過日くわじつ滯在たいざい中は御心ぎしん盡つくしの御供養ごくやうに預あづかり何なんとも感謝かんしゃに耐たえず候まをさふ。實じつは享受きやうじゆしたる物質ぶつしつの方が重おもくして與あたへたる法寶はふぼうの爲ために竭つくすことの甚はなはだ少すくかりしは遺あ憾かんに耐たえず候まをさふ。其その後ご御内室ないしつ様の御容おんよう子は如何いかに被わたらせられ奉まをす候まをさふ。時分じぶん柄御がらご自愛じあいの程ほどこれ

新候いのちよまほし

みちのくの山やまにも野のにも紅くれないに黄きに染そみはじめし秋あきの稍こまの美うつくしさを見るにつけても直すに想おもはるゝは 聖法せいぽう然ぜんの あみだぶにそむる心こころのいろにいでば秋あきの梢こまのたぐひならましとの道詠だうえいにて候まらふ。縦令たとい聖者せいじやと雖いへどもまだ曾かつて若わかかりし時ときに一もつら學業がくぎやうにのみ心意しんいを用もちひしむかしは、華嚴けごんに染そめば重々ぢゆうぢゆう無盡むじんの理りを觀くわんじ、般若はんにやを繙ひもとく時は一切さいかい皆空けいこに心こころなづみなどしてあられしやと想おもはるゝ。然しかるに聖法せいぽう然ぜんは四十三しじゅうさんの時ときよりして口くちに常つねに稱しょう名なし意いは常つねに彌陀みだを念ねんじて止やまず。寔まことに是こゝれ彌陀みだの大光明だいこうみょうは譬たとへば太陽たいやうの自然しぜん界かいを照てらす如ごとくに心靈界しんれいかいに偏照へんじやうす。常つねに彌陀みだを念ねんするが故ゆゑに彌陀みだの大靈光だいていこうに接觸せつじよくす。靈光れいこうに觸ふるゝ時は必ず彌陀みだに同化どうくわせざるを得えぬ。衆生しゆじやうの心こころはもと染汚ぜんをよごれなれども、如來にょらいの清淨じやうじやう光くわうに淨化じやうくわせらるゝ時は、夏なつの青あをくしげりし青葉あをばは紅くれないに麗うるはしくなりし如ごとくに六根清淨ごんじやうじやうとなりまた八面玲瓏はつめんれいろうとして六根ごんより光輝くわうきを放はなつ如ごとくなり、また衆生しゆじやうの感情かんじやうは種々しゆしゆの縁えんに觸ふれ事に對たいして、恐怖憂惱けうふいうのう交々こまごまに起おこるものなれども、彌陀みだの歡喜光くわんぎくわうに淨じやう

化する時は春風馭蕩何となく心ひろく體ゆたかに常に歡喜と妙樂が感じらるるようになる。とまれ信仰の眞理は精神的に彌陀に靈化せらるゝ處にあり。聖法然のあみだ佛に染まりし心が眼にも見ゆるならば、紅葉せる秋の楓のごとくに麗はしくなりとの道詠を想ふにつきても、我等も同じく彌陀の天心光に觸れて、ますます麗はしきにするまんとおもふ。願くば我がいと敬愛する所の渡邊の御一家ますく、大ミオヤの光榮をなされんことを祈り候。

當地に來りて奥羽六縣の淨家の法侶の内に、撰みえられたるものか否かはしらす三十餘名位にてみちのくの野山は紅葉を染かけしなれども、世の衆生を誘導する法侶の中にまた麗はしく彌陀の慈光に染みかゝりしものを發見することの出來ぬのは遺憾に存じ候。せめては何分かは光明靈化の人も出來るならんと末頼もしくは存じ候。椀子や柿實杯が能く成熟するに隨つて形ちは大きくなり美しき色を呈じ、内容の肉にも甘味が充分に現はれてくる。其の頃はもう核も熟したるに相違ない。人の心靈に於

ても彌陀の靈的氣候に觸れ追々成熟するに随つて何とも云はれぬ内容のうま味を覺えらるゝやうに成り申すべく候。其頃になれば心靈の核も菩薩聖衆の中に入ることに候。有餘の形に昨日とかはらねど神は淨土に栖み遊ぶ想に成り申すべく候。願くば渡邊の御一家に此靈福のあらんことを祈り申候。

百十七

欽復啓上候。御書翰によりて承れば御内室様には本月御病氣の爲め入院御手術御うけ被成候よし、追々御快方に成り追々御退院に成る事承りて驚入り候。實に何時如何なる事の發るべき哉は豫知し難き事なれば、大聖釋尊もまた太子におはせし時に、四門の遊びに老病死を見て世の非常を悟り、益求道の念彌増になられしとの事。出る息入る息を待たざる世とは大かたは唯よそ事にのみ思ひ居るも、各自の方に誰とてもまぬかれ難き運命を負擔することを悟らず、實に憐といふも中々にて

候。此頃露國の文士トルストイの人生觀てふを披見するに、彼杜翁年五十にして、
 若し人間がいかに肉の幸福を得ても肉の生活を以て目的とせば人生は實に果敢なきも
 のと、彼は其頃名譽と云ひ財産と云ひ世に美視されつゝある身にも拘らず、非常に人
 生問題に苦悶に陥り、自殺を企てるばかりに至り、つひに哲學にも從來の教會にもい
 かにしても彼が苦惱を脱する能はざりしを、自ら深く自己の窮りたる所に超然た
 る神の光明に接して、始めて心靈の覺醒したる所に、永遠不死の生命を發見し、神と
 共に常住の幸福を得ることを悟り、人生の闇黒より解脱して神の光明生活に入りて
 不死の眞理を覺り、其の歡びいふことを知らず、それより彼は從來の精神一轉して光
 明の生命と成りて、其得たる光明を以て生活に起ちしとの事。古今をいはす東西を論
 せず、心靈開く處に如來の靈境は現前し、無明に醒めたる所に光明の靈界は得らる
 べし。

一に光明名號を稱へ、口に稱へる如くに意に光明を憶念し意に光明を憶念す

ると共に身に光明的行爲を爲せば、是杜翁と何ぞ同じからざらむ。杜翁のみならず釋迦キリスト東西すべての聖人方と共に光明の中に生活せられんこと何ぞそれ疑ふべけん。

願くば御一家共に共に精神光明の生活に入り現在を通じて永遠の光明に入らんとを祈る。御家内様御病氣に付き實に生命の大事なることを自覺し玉ふならん。何の爲に肉の生命は大事ならん。是靈の永遠の生命を肉の生命の中に得ん爲なり。願くば御病後御自愛の程是祈上候。

百十八

此頃の熱さは殊に酷敷く覺え候。この酷敷あつさにてこの一年間の我國人のいのちを養ふ稲をいや榮えむが爲の大ミオヤの厚き御恵みのしからしむる所と存じ候へば、中々にあつさのつよきほどに御慈みの深きを感じられ候。此の嚴敷御熱さの中

に皆様如何被爲在候哉伺上候。中條の里にちぎりし我が清き同胞のなつかしきにつけても思ひ出さざるを得ざるは大ミオヤの大なる慈悲にて候。大ミオヤの大なる慈悲をおもふと共に感じらるゝはきよき吾が同胞の深きまことにて候。清霽に星界無涯の天空を眺めても大ミオヤの聖旨の實に高遠玄深なるを驚嘆いたし候。一切萬物悉く如來藏性の發現なりと信する時は野に咲ける百合の花にも眞如實相のいろを観じられ候。實に夕べあやなる西の空むらさき匂ふ雲にも色即是空の眞理をさとられ候。無盡々々の宇宙間には一塵ばかりなる地球上の萬物即ち自然の現象にも心して見る時は大ミオヤの不可思議なる御むねのこもらぬ物はなきやにおもはるゝ。地球に比ぶれば中々に小き吾人の頭腦の中にも宇宙萬象悉く現せざるはなし。實に不可思議なるは眞理である。大ミオヤの御はからひである。

絶大無限なる宇宙は悉く大ミオヤの身心なのである。宇宙間毫厘もミオヤの身心ならざるものはない。其無限の大ミオヤは吾人の信仰の心水に全身を容れて余す所な

し。親おやのものは子このものである。宇宙うちう大だいの我われとする大おほミオヤの有ものが即すなはち子こたる吾われが有ものである。宇宙うちうに比ひすれば一塵ごんたる地球ちきうなる其地球そのちきうの一塵ごんたる我身わがみうたかたの寄よるべきものにはあれども心こころてふ實じつに不思議ふしぎの我われを以もつて全宇宙ぜんうちうに齊ひとしき吾われである。

阿彌陀佛あみだぶつを念ねんする吾わが心こころ即すなはち是これ阿彌陀佛あみだぶつである。阿彌陀佛あみだぶつたる我心わがこころである。

古人こじん云いはずや、一念ねん彌陀みだを念ねんすれば一念ねんの佛ほとけ、念々ねんく彌陀みだを念ねんすれば念々ねんくの佛ほとけとの言ことば常つねに佛心ぶつしんと相應さうおうする時ときは我心わがこころ是佛心これぶつしん。古人こじん曰いはく爾なんぢが齡よはひいくばく。答こたへて曰いはく、無量壽佛むりやうじゆぶつと同年どうねんと。然しからば無量壽佛むりやうじゆぶつは幾干いくばくぞ。曰いはく、我われと同年どうねんと。實じつに此こゝに到いたつて徹底てつていしたのである。

百十九

今いま柏崎かしはぎに來きて感なんじらるゝは此町このまちばかりでもなからうかなれどもいかに靈妙れいめう性に富とみて居ゐる腦のうが少すくな様やうである。天性てんせいのみが發達はつたつして靈性れいせいの人の稀まれなのは實じつに感かんせざるを

得ぬ。講習を寄席や劇場のように考へて來會して聞いて見ても天性の脳には靈妙の聲はさつぱり聞へぬから翌晩は來ぬ。喩へば天に金烏赫耀として輝くに金剛石に映する時は寶石反つて輝を放つ。若し靈性琢磨する時は靈日の反映普ねく照さざる所なし。臭物に蠅集るの諺、此地に來りても感ぜざるを得ぬ。若し臭氣のある談物なれば此の蠅的頭腦の青年も群集するならんも然れども何分にも光輝ある所にはあまり接近するを好まず。それでも教へて飽までに見込みなきにあらざるべし。いかにとなれば進化説によれば人間と雖ももと高等動物より進化したる生物である。現在此地の天性の腦をいつかまた靈性の人と進化せざらんや。或は彌勒の出世を待つかも圖られず。光輝あるものは蠅が嫌ふとて敢て臭氣を放ちて、蠅を聚むる必要も感せず。けれども現代は柏崎に限らず何の青年は斯の如く比々皆然らざるはなしと言つて可ならん。さればこそ大奮發して心靈闇黒時代より光明の世界に光化せんと欲せば益々勇氣を鼓舞して道の宣傳に力行せんとす。願くば其地方に於て世の燈明となりて靈の闇黒より誘ひ引

れんことを。

光明の生活是人生の歸趣。

願くば御一家 大ミオヤの光明の中にます〜光榮あらんことを祈候。

百二十

實に光陰過ぎ易し。白駒須臾も停らず。然るに自ら自己を省察する時は五塵六欲の爲に心を馳せ想を汚す。只々日中天に輝く太陽の如く心靈界を永恒に照臨し玉ふ。如來無量光の中に自己を反照し、聖き名を稱へて聖意の我心に現れんことをこそ望まし候。如來は清淨と歡喜と智慧と不斷との光明を以て永恒に我らが心意を照し玉ふ。我等如來の中に我を投じて名を稱へ奉るとき我等が心は清淨となる。風の雲を散らすことの如くに。雲霧れて日光の現はる、如くに、如來の歡喜光は我等が心情に顯る。我らが愚痴も迷妄も如來智慧光に照破せられ、また如來不斷の光明に我等は勇み進み

てすべての今日のつとめをつとむることが出来る。念佛の中に清淨と歡喜と心の中にコン／＼と湧き出づ。かねてのべし如く私共の心は直黒な炭や石炭見たやうなものなれども我々が煩惱の炭にも火がつく時は冷い情もいつしかあたゝかな慈悲や同情ともなる。直黒な煩惱も至誠の赤紅とかはる。佛心と衆生心と不二一體となる念にて候。若し私共の心が如來のすべてをのけてしまふたならば炭よりも甚しいものとしかおもはれぬ。火鉢の中の炭でも一つより二つ三つと幾つも具合よく置いて火の種を中に入れて漸ろに風を扇ぎ入れる時は徐々として發るが如く、一家の中にも一人より二人幾人も具合よく打揃うて、皆の中に如來の御慈悲の火の種を名號の中から受けて口稱念佛と云ふ風を以て扇ぐときは、各自の心意に慈悲の光明が漸次に燃へつき、ありがたく樂しく、相互の間に何とも言はれぬ靈感の極りなきを覺ゆるに至らむ。

矢張り宗教心を養成するも生理的に身も口も意も共に共に熱心につとむるにあらざれば成熟することと難きものと信ず。幸に御一家は御地に於ても最如來さまより選

ばれて大慈光明の中に攝め入れられしことは最も是光榮なるものにて候。

百二十一

良に惟れば如來は本法界身に在ませば盡天地一切の處に在まさる處なし。されば十萬億土の彼處にも在ませば今現に此處にも在ます。常にいつも現にこゝに在す大ミオヤなる如來の聖名を稱えて聖旨の我心に現はれんことを祈り奉れば、あなたのきよきみこゝろは我等が心にあらはれぬべし。

我等が聖名を呼び奉れば、大ミオヤは現にこれを聞き玉ふ。今現に爰に在ます如來に在せば我等が至心に敬禮し奉れば、あなたは現にこれを視たまふ。我等心に頼もしく念じ奉ればあなたは之を知り玉ふ。こなたよりあなたを憶念し奉ればあなたよりは尙深く我らを憶念し玉ふ。あなたのみこゝろと我らのこゝろと相互に深く愛念しあなたと毫も離れざれば之を親縁と爲すと聖善導は釋し玉へり。

またこなたに現げんにこゝに在ます如來にょらいなればおがみ度たいとおもつて念ねんじ奉たまれば現げんにこゝに現あらはれ玉たまふ。少すこしも遠とほく隔へだて、居をらぬ故ゆゑに近こゝろ縁えんと名なくと。

また如來にょらいはすべてに超こへて大だいなるみ力ちから在あらませば我等われらがこゝろの惱なやみにも強つよき力ちからを以もつてたすけ玉たまひ、いかなる事ことをもたすけ玉たまふ最も強もつとつよきに在ませば増上縁ぞうじやうえんと名なづく。我われら念佛衆生ねんぶつしゆじやうはみな大だい悲ひの御子みこなれば

みおやを頼たのむ一心しんなれば必かならずあなたは強つよき力ちからを以もつてたすけ玉たまふ。

ア、頼母敷哉たのもしひかな、念佛衆生ねんぶつしゆじやうの子こと大だい悲ひのミオヤの親おや子の間あひだには親縁しんえん近縁こんえん増上縁ぞうじやうえんの三縁さんえんを以もつて常つねに結むすびつけて切きつてもきれぬ御因縁ごいんえんあれば、悦よろこびいさみて口くちに御名みなを稱とへ心こゝろにはミオヤを慕したひ憶念おくねんすれば、いつしか我われらが淺間敷心あさましきこゝろもあなたのと聖きよきみむねにきよめられ、闇くらき心こゝろも明あるく惱なやみの心こゝろも樂たのしくあらん。故ゆゑに此この世後よのちの世よともあなたの大慈光だいじくわうのなかに安住あんぢゆうする身みのいと安やすき。されば越路こしぢのあなたと古ふるき京きやうの此處こゝと處ところはしばし隔へだつれど同おなじ大だい悲ひの懷ふところの裡うちは共に大おほミオヤのみむねをたよる一つ心こゝろ、形かたちは別々べつべつ

なれども心の中は同じ大ミオオの恩寵に満さるゝことなればまことに頼もしくぞ感じられ候。

百二十二

肅白、八重九重に咲き匂ふ櫻花も散りて今年の春の名残を告げぬる此の頃新緑はみどりを添ふる樹々の梢にも大ミオヤの御圖らひのほどを感せられ深き碧のいと床しう有る。萬物の中に大ミオヤの恩寵を籠められ何を見るにもまた彼を聞くにもありがたくぞおもはれぬ。

さて此程は御書簡をもて御たづねにあづかり何とも恐縮に存じ候。實は其折宗教大學生等の催にて小石川一行院てふむかし徳本行者の遺跡を道場として別時三昧をつとめ其方に出で夜を晝につぎて忙しなさにつひに御返事さへも差上げ申さず甚だ失禮仕候。愚柄の病氣と云ふ事に就いては全く病氣なしと云ふことにはあらざれど

も、然れどもさる人の郵便のよみちがひから愚衲のしらざる間にさはぎが大きくなりたる餘響を御地にまで傳へて御心配を懸けたるやうな次第に候。左様な譯なれば願くば御心を煩し給はざらんことを望み候。

實は其の病氣よりはもつとく重き病氣の爲に寐てもさめても心を煩はして居る次第にて候。むかし釋尊の御在世に維摩居士が重き枕に臥しけるを釋尊までも御心を惱給ひて誰か維摩の病床に訪問せよと命じ給ひけれども誰も進んで命をうけるものは有らぬ。故に文珠ぼさつが御訪問申されしとき、

維摩の病氣は一切衆生の病吾が病、衆生の病治し盡きぬ間は吾が病は治することを得ずと云はれしとの事に候。

願くばすべての人々を大ミオヤの光明に浴せしめて心の病氣を癒してやりたく存するのが愚衲の病にていつでも休ろう間もなく熱を起して居ることにて候。

一切衆生の心の病氣平癒を一心不亂に大ミオヤの聖意を祈り申候。

先はかやうな次第なれば此病氣平癒の爲に御地の人々に如來の慈悲を傳へて祈り給はんことを希候。

御返事あらく是のごとくに御座候。

百二十三

如來の聖意にきよめられたる吾きよき同胞なる原氏の清き好偶者のきみにまで白す。

文に夫唱婦隨なる語あり。

君先に如來の聖きみむねにきよめられて恰も白蓮華のごとき清き潔き心を以て其の婦のきみを誘へば婦の君はまた紅蓮華の如き赤き誠心を以て共に如來の聖意に仕え奉るに至りしはいかに麗はしきぞ且つ芳しきぞ。

越路に於て數多無數の家庭の中に恁の如き清き麗しき家庭をえらみくつて柏崎の原

家の庭に咲き匂ひて光榮をあらはすことのいかに悦しきことぞ。

世の人には自己の精神の奥底に永遠に活きる靈性がありて

大ミオヤの恩寵によりて發現すべきの眞理を知らず人生をたゞ仇に果敢なきかりの骸やまたは物質の中にのみ望を起し、あだなる榮花やかりそめの事にのみまどひて永遠に活くべき眞理を發見することを知らぬ比々皆爾り。さて

如來は大慈悲のミオヤにまします。

如來の本體は宇宙に周遍する大靈體に在せども我等を愛し給ふ慈悲のみむねより慈悲の面とあらはれ相好光明遍ねく十方世界を照して念佛衆生に慈悲のみむねをそぎ給ふ。

如來は眞金色にして端正無比にして恰も朝日のかゞやくごとくに我等を照し給ふ。されば

わがみほとけの慈悲のおも、朝日のなかにうつろひて

照りかゞやけるさまみれば、靈感きはまりなかりけり。

わがみほとけの慈悲のおも、夕日のかたに映ろひて

照るみすがたをおもほへば、靈感きはまりなかりけり。

大ミオヤは常に我等をしばしもわするゝひまなく愛念し給ふが故に我もまた、大ミ

オヤを愛慕せざるを得ぬ。我は 大ミオヤの慈愛深きを常におもふと共にまた吾同胞

たるあなたを忘ること能はず。北と東と地はしばらくへたつれどこゝろは同じ

大ミオヤのなかに毫もへだたつて居らぬ。

あゝなつかしき原氏の家庭よ。ますますミオヤの光のなかにいよ光榮あらんことを

いのる。

永遠にかはらぬ光明の中に新しき年を迎ふるもまた悦ばしきことにこそ。

何れ來四月の御面會を期し候。

願くば御老母さまによろしく。ますます光明の中に麗はしき御ひぐらしあらんこと

を。

百二十四

月日つきひでさへも此この娑婆しやほには安心あんしんしてゐること出来ぬと見みへて、來くる月つきも來くる日ひも須す臈らふも停とどまらずしてづんくと逝いつてしまふ、實じつに無常むじやうにて候まらふ。それも一切さいう有爲うゐの法はふの夢む幻泡露げんほうろの奥底おくぞこに存在ぞんざいする絶對無限ぜつたいむげんの、大光明だいくわうみやうしや者しや、大壽だいじゆしや者しやの在ましますありて、一切さいを救すく靈ひし給たまふことを聞きいて信しんを得うる者ものは實げに幸さいにて候まらふ。

月つきも去されよ、日ひも逝ゆけよ。汝なんぢが意いに任まかす。

我われは常つねに聖名みなを稱ととへて。永遠えいゑんの光ひかりなる如來にょらいにたよる。そは本ほん來らい我等われらが眞實しんじつの大おほミオヤに在ませば。

如來にょらいはたよる子こを抱擁ほうゆうして、永遠えいゑんの命いのちの中に、無限むげんの幸かう福ふくを與あたへ給たまふ。吉岡常盤よしおかとこきはこ子このきみよ。いつも離はなれず護まもらせ給たまふ。大おほミオヤの慈悲じひの中に、聖名みなを稱ととへて安やすきを得え

玉へよ。

今年の唐澤山の三昧會には、御待ち申したる甲斐なし。

お出でなきは遺憾に存じ候ひしも、之れまた御都合上止むなき次第にて候。

長岡柏崎何れも少數にて、岡の町の衆、約七八名來られ候。すべて參加する者三府

十縣、凡そ六十五六名にて候。

さて其の砌りは、御心に懸けさせられて、名産の珍果御惠投に相成り、厚く感謝仕

り候。

早速御禮狀差上ぐべき處、彼此にて延引致し、甚だ失禮仕り候。

時分柄御自愛是祈候先は御禮あらしく如斯御座候。

百二十五

大ミオヤのみひかりのなかに、ますます信念御すゝみなされ候事歡喜この事に候。

天地萬物も皆悉く、大ミオヤのものなので、其の中の生きとし生けるものは、みな子である、大ミオヤの分れなる釋迦如來は御説きなされてゐる。

本々如來の御子なるものを、人間といふサトオヤに預けられて、形をそだてうけて見れば、本の本覺のオヤサマをば在ますとも知らず、只々娑婆でかりうけたる形ばかりを我と思ふて、御子たる靈性は、生れたばかりの赤子よりは、まだくかたちつからずして信仰の生に新たに生るゝ事の出來ぬ人々ほど、世にあはれるものはなしと思へば、すべての人々を靈に新たに生きさすべき光明の宣傳につとめさして頂くは、おやさまよりの使命として、悦びて働く事が出來申し候。

世には如來さま眞の御親を眞から愛樂する事の出來ぬ人々は、他人の父でも呼ぶ様に、あみださまくとはいふけれども、吾がおや様といふ事を、きまり悪るさうに思ふて居る。

そはまゝ子の様な氣もちするものであらうと思ふ。其の故に死んで冥途に行けば

おやさまかは知らねども、現在ではおやさまを呼ぶ事のできぬ人は、よしや死んだからとて、心は今の心であるものを急に變るものではないと思ふ。ほんとうに大ミオヤをおやさまと呼ぶ様になれば、全く心の生れ更りたる信仰の人にて候。
新潟にても眞からおやさまを呼ぶ兄弟衆が一人も多く出來ん事を願はしく候。

御書簡の村田さんの御娘子さんが、御病氣にて鎌倉に轉地なされ候由、おや様の御恵みに浴して、心の生れ更りになる様にどうかおや様のみむねを傳へ度に就いて、十五日静岡縣清水實相寺にて、別時つとめ、廿一日夜行にて歸途、廿二日朝伺ふては如何に候哉。

廿八日迄、下總にて授戒、廿九日鎌倉に立寄候へば、廿九日夜行にて祖山には一日朝つく事に成
祖山の方はいかゞと存じ候。祖山をすまして大阪府下にて、五日間、夫れから福井

若松にて三日、或ひは五日、歸り路にまた鎌倉に立寄りて、御話しいたし申候。

當月廿二日朝では如何に候や静岡縣清水港實相寺宛御一報下され度候。先は貴

答かたゝ如斯に御座候。和南

百二十六

春の暖なる氣候に花のごとくにいとあたゝかなる 大ミオヤの慈悲の光に心念の

開かん事を願はしく候。

此頃説に承はれば先つ日祖山に於て、つとめ畢りて御歸りに先だち、風邪のため
に御滞在なされて、御保養なされしやうに傳へ承はり候へ共、其のち云何の御經
過にてあらせられ候哉。定めて已に御快後の事とは存じ候へ共、御尋ね申し上げ候
また小池上の御内室様にも御いたづきに相成候よし矢張り昨今は御全快の事なら
んと存じ候も、願はくば御ついでに別紙御とゞけの程を望ましく候。

百二十七

吹く風にさそはれて、梅の花の散りゆくを、見るにつけても、此ほどは盛りにいるをきそひ、香を争ひて、咲き匂ひし花も、夕まぐれの風にあはれ名残をのこして、地のなかにすがたをかくしぬる果敢なさをおもへば、いろはにはへどちりぬとの眞理をいなむことはできぬと存じ候。

さあれ、我身もまた有爲轉變の世のなかにうけし身にしあれば、たれか常なるものならぬ。

さればこそ、祖山の廟のもとに専ら念佛三昧に、こゝろを、無量壽の御名を通してかのみほとけのみむねにとけこんで、

無量壽のみ法に同化しぬれば、有爲のおく山、あらかに越へて、永恒の光のなかには、淺き夢も見じ。しかあればまた再び無明の酒にも酔はじものを。

あれかたじけなや、我等が大ミオヤのいとかしこきみむね、子をおもふ、御慈悲の御面かげを、おもへば、たゞありがたくて、なむあみだ佛くと、いふよりほかの言もあらじ。

別時三昧を發起したる淺井法順上人には、我等が爲に、先ちに道するべし給へること、もはや今日此頃は、彼しに上品の花ひらき、無上の法を聞きまつりて、無生法忍を開きしならんも、我等はまだこゝにあるほどに、哀悼の意禁じ難く、たゞ大ミオヤの慈悲の御名を稱へて、手向けまつるのみにて候。

此ころの流行風のみにてもかすかぎりなきひとくの、なきかすに入るひとの、いとあはれにこそ感せられ候。

さあれ吉岡常盤子のきみよ、賜はりしいのちをもて、いよく三昧の功を積、上品の蓮のうてなにのぼるまではたもちてたまへよ。

歡喜光裡に新らしき年を迎へ、不斷光中にますく如來の光榮を顯はすべきやう、此月から進む事にいたしませう。新らしき年の始めに、御家庭の新たに於て、また新たに改まり、よろこばしき御音信に接したことは、實に嬉しく存じます。

願はくば天地の大ミオヤなる無量光にしてまた無量壽にまします如來に、すべてをさへげて御頼み申上げると

大ミオヤは必ず宜しきにはからひ給ふて下されます。

無量光は大宇宙の靈的太陽であります。肉眼に見ゆる太陽は矢張り本は大ミオヤの分身であるけれ共、形の萬物を活かして下さる力となつて居る。それで太陽の力で、此のカラダは生活きて居つても、無量光如來の靈的光明に依らざれば心靈は活きる事ができません。

如來の光明に無量あれども、清淨光、歡喜光、智慧光、不斷光との四類の光明が尊いのであります。

私共の五官即ち眼耳鼻舌身の心は視たり聽いたり香を嗅いだりして心を汚すのは恰もカラダに垢の出る様なのです。心の汚れは大海の水をかたむけて洗ふても清くはならぬと、經に説いてあります。唯一心に念佛して如來の清淨光に清められる時に始めて清くなるのです。

私共の感情は、憂苦や惱みが多いのであります。如來の歡喜光に遇ふて始めて歡びと樂しみと平和と慰安とを感じられるのであります。

私共の魂は眞闇なこと暗夜の如くなのであります。それを悟りの光明の中の人として下さるのは如來智慧光であります。

私共の意志は罪惡であります。この罪惡の奴をアナタの聖意に叶ふ様な意志にして下さるのは如來の不斷光であります。

私共はどうしても、如來の大神光を蒙らなければ、永遠の生命清き人となることは出来ませぬ。

此のカラダは太陽の光で生きて居るので、此の心靈の清き生命は如來の光明にて生きて居るのです。太陽の光で生きてゐるのは、一切の動物でも、植物でも、人類でも皆同じ事です。

如來の光明にて靈的生命として生きて居るのは、清き信仰の人にて、諸の聖人がたと同じ生命なのです。

百二十九

念佛の念と云ふ字は、(人二心)二人が一つに爲つた心のすがたです。故に念佛の念は、かたちは一人で居つても、心のつまにいつでも如來の心と一になつてゐるのです。此頃の寒さについて、火鉢の中の炭火に寄せて所感を話して見ます。

火鉢の中の炭火は、此寒き中にも拘はらず、春の桃の花よりもモット眞紅な色を呈し、而して如何にも愉快さうに快活にうれしさうに火鉢の中に燃えつゝある。而して愛嬌よく火鉢に接近する人の手を親切に温ためて呉れるし、それからお茶を飲まうとすれば水を煮て呉れるし、お餅などを焼て呉れるし、此の寒さに何人にも愛さるゝ炭火君も、前に炭箱の中に眞黒な顔をして冷たい時には誰も手もつけてがない炭なのです。一寸でも手を觸るれば、直に眞黒に汚すものであるから、さはるさへ人々が厭ふて居る。其炭どんも火鉢の中へ入れて火と一處になると、誰も皆に愛される。炭と火とは二人が一つになつて、離れぬ仲となるからである。炭は火を我有として居る火は炭を我有として居る。是が念の字のすがたであります。

私共の眞摯な炭の様な煩惱の心でも、如來の愛の光の火が加はると、炭に火がついたやうに娑婆の憂の寒さも忘れて、大慈悲の火にあたゝめられて、日々に愉快にありがたく日暮しが出來ます。アナタの心に如來の光火が加はる時は、いつでも快よく

胸のうちがありがたくアタタカになります。いつでも佛様と一つになつてをる心が念佛と申すのであります。

お正月のおトソで酔ばらつてゐるお客さんは、御酒と二人一つになつて居るのです。アナタ方や私共は尊き清きありがたき如來様の慈悲心と二人が一つに成つてゐるのです。

それでも口に念佛の空氣が通はぬと、念の火力が弱はります。念佛の氣さへよく通ればいつでもカン／＼として居ります。

百三十

此頃の温かなる氣候にもよほされて、桃や櫻の花の開く様に、小池上の家庭の花もいや榮えてます／＼麗はしさを呈し、薫ばしさを流さん事をねがわしく、一心不亂に念佛三昧をつとむる處に、御慈悲の光にもよほされて、心の花はひらき申し候。

其のち承はれば、先つ日、祖山の三味會のつとめ終りて、御歸りの途に就かんとする頃ほひ、病魔の爲に襲はれ給ひて、御保養なされしとの事、けふ此頃は定めて御快方の事とは存じ候へ共、そののちの御經過如何哉。

延引ながら御伺申上候。

さあれ、念佛三味の功により、無始以來の山なす業障、海なす罪障を果さん爲に、風の神の手をかりて、發汗のしたゝると共に、罪も障りも消え果てゝ、輕くなりしものとするば、之れまた大ミオヤの御方便ならめと存候。此度の風の神の手は如何にも惡辣なる、鬼をもたをすやうな男子もたちまちに引きさらひて、闇きゝよみぢのなかにもたらしてゆく、げにおそろしき魔の神よ。

願はくば御一家いよゝ光明の一路に向上せん事を。ますゝ光明ならん事を祈り候。